第V章　遺　　物

1　瓦　　塼

数次にわたる発掘調査により、大量の遺物が出土しているが、その大半が瓦塼である。ここでは、西隆寺の寺域全体における瓦使用の実態を明らかにするために、奈良国立文化財研究所で保管している過去の調査資料を加えて、一括して述べる。以下、出土点数の表記は全体を対象とし、今回の百貨店増床と都市計画道路建設に伴う調査で出土した点数を（　）内に示す。

A　軒　丸　瓦（PL.30～35, Fig.31～33）

軒丸瓦は339（187）点出土している。このうち型式が判明するものは299(167)点あり、25型式45種に分けることができる。ほとんどが奈良時代に属するが、ほかに平安時代前期に下る資料が１点ある。軒丸瓦の外縁形態の分類は、基本的に『平城宮発掘調査報告XIII』[(1)]（以下、『平城宮報告XIII』のように略記する）にしたがうものとするが、直立縁については、あらたに直立縁Ⅰ・直立縁Ⅱの区別を設けた（Fig.30）。

外縁形態の分類

三角縁　内面が内傾するが、上面に平坦部をつくらないもの

傾斜縁Ⅰ　内面が直線的に内傾して、上面に平坦部をつくるもの

傾斜縁Ⅱ　内面が内彎して匙面をなし、上面に平坦部をもつもの

傾斜縁Ⅲ　内面が外反し、上部に平坦面をつくるもの

直立縁Ⅰ　内面が直立気味に立ち上がるが、上面が丸みをもつもの

直立縁Ⅱ　内面が直立気味に立ち上がり、上部に広く明瞭な平坦面をもつもの

Ⅰ　単弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代）

6125型式　**A種**15(７)点が出土。中ぶくらみの中房内部に１＋８の蓮子をおき、外側に量感のある13弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は素文の直立縁Ⅰである。文様の地と同じ面に、笵端の痕跡が残る（PL.35）。また、笵端の後方が逆にくぼみ、枷型の使用を示す例が

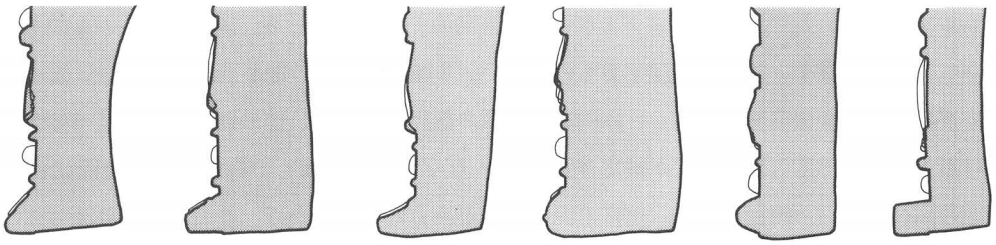

Fig. 30　軒丸瓦の外縁形態の分類

（1）　毛利光俊彦・花谷浩「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」（『平城宮報告XIII』1991年）251～342頁。

見られる。丸瓦部凸面と瓦当裏面はタテ方向のナデ調整。接合部内面に工具による押圧調整痕が残る。やや軟質で、灰黒色を呈するものが多い。

6133型式　間弁がなく、外区内縁に珠文をめぐらす。外区外縁は素文である。A種7(3)点、C種1(1)点、D種1(0)点、N種16(11)点、O種1(0)点、P種4(0)点が出土した。このうちA・C・Oの3種は外区を内外縁を分ける圏線をもつが[1]、D・N・Pの3種は欠く。**A種**は、中房蓮子が1＋5、周囲に12弁の蓮弁を配する。外縁は厚手の傾斜縁Ⅰである。軟質で灰黒色を呈する。**C種**は中房蓮子が1＋6で、13弁の蓮弁をもつ。外縁は厚手の傾斜縁Ⅰ。丸瓦部は、凸面をタテ方向にヘラケズリし、凹面から瓦当接合部にかけてタテ方向のナデ調整を施す。接合粘土の部分には、指ないし工具による押圧調整痕が残る。瓦当裏面はやや中くぼみとなり、ナナメ方向のヘラケズリ調整。下半部は円周に沿ってヘラケズリを行う。いくぶん軟質で、灰白〜灰黒色を示す。**D種**は、1＋6の蓮子をおく中房の外側に、16弁の蓮弁を配する。外縁は厚手の傾斜縁Ⅰ。瓦当裏面は中くぼみとなる。比較的硬質で淡灰色を示す。**N種**は、中房蓮子が1＋4、蓮弁数は16である。外縁は高い直立縁Ⅱ。丸瓦部の凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面下半部の円周に沿って、ヘラケズリを行うものもみられる。やや軟質で、灰白〜灰黒色を呈する。**O種**は中房蓮子が1＋6、12弁の蓮弁をもち、外縁は傾斜縁Ⅰである。瓦当は厚く、軟質で灰白〜灰黒色を示す。**P種**は、中房蓮子が1＋4で、蓮弁数は16。外縁は直立縁Ⅱである。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面はタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整を行うものと、タテ〜ナナメにヘラケズリするものとがある。比較的硬質で、灰〜灰白色を呈する。

6134型式　間弁をもち、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。**Aa種**1(1)点が出土。1＋8の蓮子をおく中房の周りに、12の蓮弁を配する。外縁は厚みのある傾斜縁Ⅰである[2]。瓦当裏面はやや中くぼみとなり、タテ〜ナナメ方向のヘラケズリ調整。下半部は円周に沿ってヘラケズリする。文様の地と同じ高さに笵端の痕跡が残る。硬質で淡灰色を示す。

Ⅱ　複弁蓮華文軒丸瓦（奈良時代）

6225型式　外区内縁を圏線文とし、外縁に凸鋸歯文をめぐらす。大きめの中房内部に1＋8の蓮子をおき、まわりに8弁の蓮弁を配する。A種16(6)点、E種1(1)点が出土。**A種**は、弁区の地が盛り上がり、弁端が尖る。外縁は傾斜縁Ⅰで、平坦面の幅が広い。横置きの成形台を使用し、粘土の積み上げによって瓦当部をつくる成形台一本造りである。瓦当と丸瓦の接合痕跡がなく、積み上げた粘土が水平方向に剥離した状況を示す（PL.35）。丸瓦部外面はタテ方向のナデ調整、瓦当裏面にはタテまたはヨコ方向のナデ調整を行う。灰色の硬質のものもあるが、概して軟質で、灰白色を呈するものが多い。**E種**は、文様の地が平坦で、外縁は低く幅広い平坦面をもつ直立縁Ⅱである。本例は下半部の破片であるが、他の資料でも丸瓦の接合痕跡はなく、A種と同じ製作技法が推定されている（『平城宮報告XIII』274頁）。瓦当表面には、笵詰め以前についた布目が残る。他にも同様の例がみられることから、この種の軒丸瓦の製作技法における特徴を示すものかもしれない。硬質で灰〜灰黒色を呈する。

積み上げによる瓦当の成形

瓦当表面の布目

(1)　西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告』1976年（以下『西隆寺報告』と略記）では、O種について「外区内外縁の圏線をもたず高い直立縁」とする（33頁）が、誤りである。

(2)　『平城宮報告XIII』では、「直立縁に近」いとしている（263頁）。

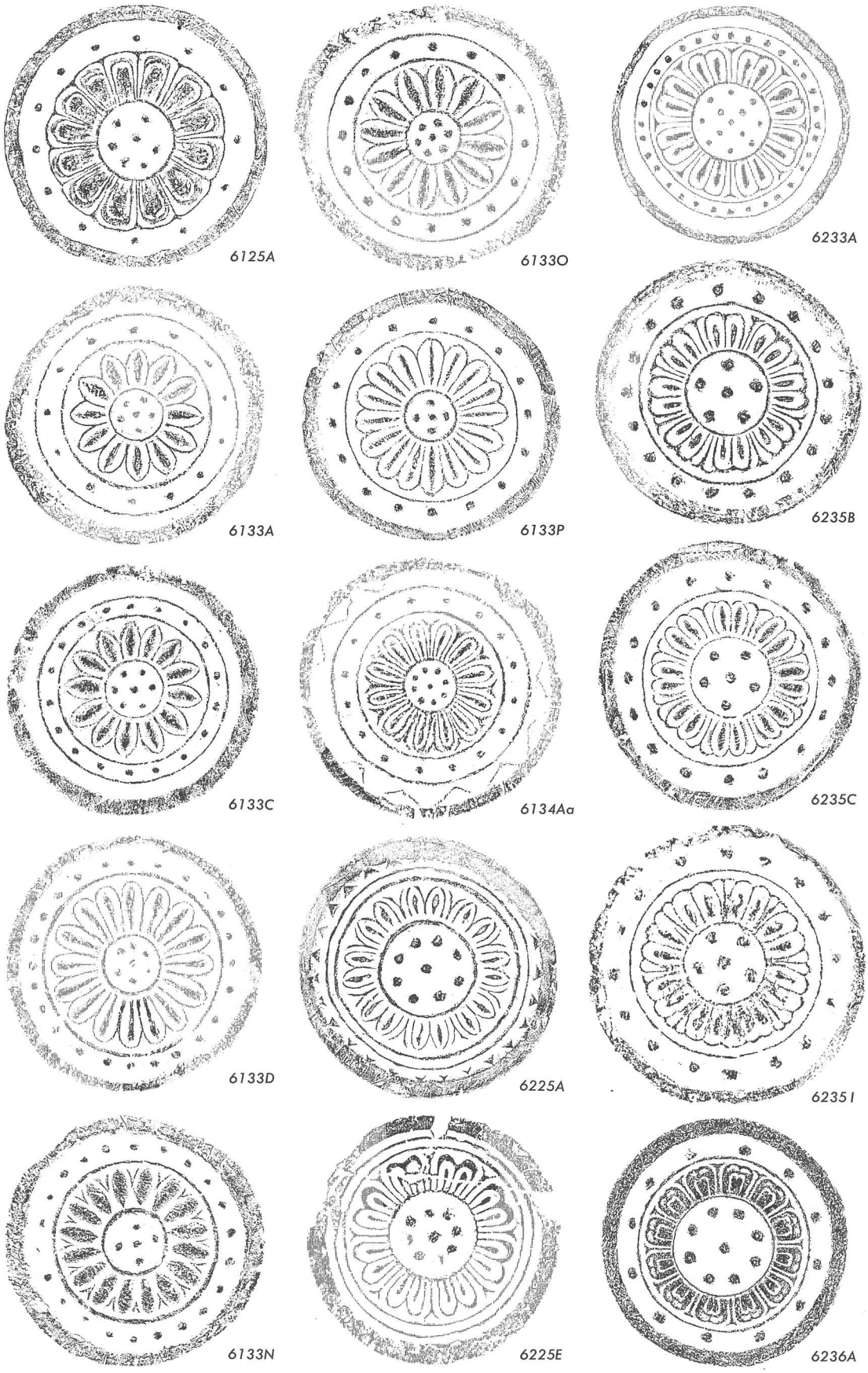

Fig. 31　軒丸瓦拓影 1

6233型式　中房内部に１＋４＋８の蓮子をおき、まわりに８弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は素文である。**A種**１（１）点が出土。外縁は傾斜縁Ｉで、上部の平坦面はケズリ調整による。丸瓦の接合はかなり深く、凸面にタテ方向のヘラケズリないしナデ調整を施す。灰赤褐色を呈し、ごく硬質である。藤原宮式。

西隆寺で最も多い軒丸瓦

6235型式　いわゆる東大寺式の軒丸瓦である。低い中房のまわりに８弁の蓮弁をおき、外区内縁は珠文、外縁は素文となる。Ｂ種１（１）点、Ｃ種111(62)点、Ｉ種25(11)点が出土している。あわせて型式の判明する軒丸瓦の46.2％（軒丸瓦総数の40.7％）に達し、群を抜いた数量を示す。**B種**は、中房蓮子が１＋５で、蓮弁の照りむくりが大きい。中房の地は外区内縁に比べて高く、外縁は直立縁Ｉである[1]。丸瓦部凸面にタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面上半にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面下半の外周部はヘラケズリ、その内側はヨコ方向のナデ調整である。比較的硬質で、灰黒～灰赤褐色を呈する。**C種**は、ふくらみをもった中房内部に１＋５の蓮子をおく。外縁は直立縁Ｉである。丸瓦部凸面の調整は、タテ方向のヘラケズリ。丸瓦部凹面から瓦当裏面にかけては、タテ方向のナデ調整を施すものがほとんどだが、瓦当裏面を不定方向に細かくヘラケズリするものもある。また、瓦当裏面が中くぼみとなる例もみられる。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残るが、笵端の後方が一段下がるものも存在することから、枷型の使用が想定される（PL.35）。概して軟質であり、灰白～灰黒色を示す。軒丸瓦の中では出土量が最も多く、型式・種の判明する軒丸瓦の37.8％（軒丸瓦総数の32.7％）を占める。**Ｉ種**[2]は、Ｃ種と同じくふくらみのある中房内部に１＋５の蓮子をおき、外縁も直立縁Ｉで共通する。外区内縁の幅はＣ種に比べて広く、珠文帯の地が盛り上がる。また蓮弁は子葉と弁端が高く突出し、間弁は小さめである。調整手法はＣ種と一致しており、同様に笵端痕跡を残す例が認められる。灰白～灰黒色を示し、軟質である。

6236は6235に後出する型式

6236型式　基本的な文様構成は6235型式に近いが、子葉を分ける弁中央の界線をもたず、また蓮弁数も８弁以外のものを含む。Ａ種４（２）点、Ｄ種10（７）点、Ｆ種25(14)点、Ｈ種１（１）点が出土。**Ａ種**[3]は、径の大きな中房内部に１＋８の蓮子をおき、まわりに12弁の蓮弁を配する。蓮弁の盛り上がりが大きく、外縁は直立縁Ｉ。西隆寺から出土した資料は、いずれも笵全体が西大寺塔の創建に伴う同笵例にくらべて著しく摩耗している。ただし、西大寺からは同程度に摩耗が進んだものも出土しているので、そうした製作時期の遅れる一群が両方へ供給されたことがうかがえる。文様の地と同じ面に笵端痕跡が残り、丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリののち、瓦当近くをヨコ方向にハケメ調整するのが特徴的である（PL.35）。この技法は、西大寺から出土する同笵資料のうち笵の摩耗が進んだものにも認められるが、一方、笵が摩耗していないものでは観察されない。丸瓦部凹面から瓦当裏面にかけては、不定方向のナデ調整を行う。比較的硬質のものと軟質なものがあり、灰黒～灰白色を呈する。**D種**は、やや中高の中房内部に１＋７の蓮子をおく。蓮弁は８弁であるが、平板で線的な表現となる。外区内縁は珠文、外縁は素文の直立縁Ⅱである。瓦当裏面には、不定方向のナデ調整を施す。灰～暗灰色の硬質のものと、灰白～灰黒色の軟質なものとがある。**F種**は、中央が盛り上がった中房内部に１＋６の蓮子を配する。蓮弁は９弁となり[4]、一段低くした中心部に子葉を近接して並べる。外区内

（１）『平城宮報告XIII』では、傾斜縁Ｉとする（255頁）。
（２）『西隆寺報告』では6235Cと混同している。
（３）『西隆寺報告』で6236Eとしたものは、6236Ａである。
（４）『西隆寺報告』は10弁とする。９弁が正しい。

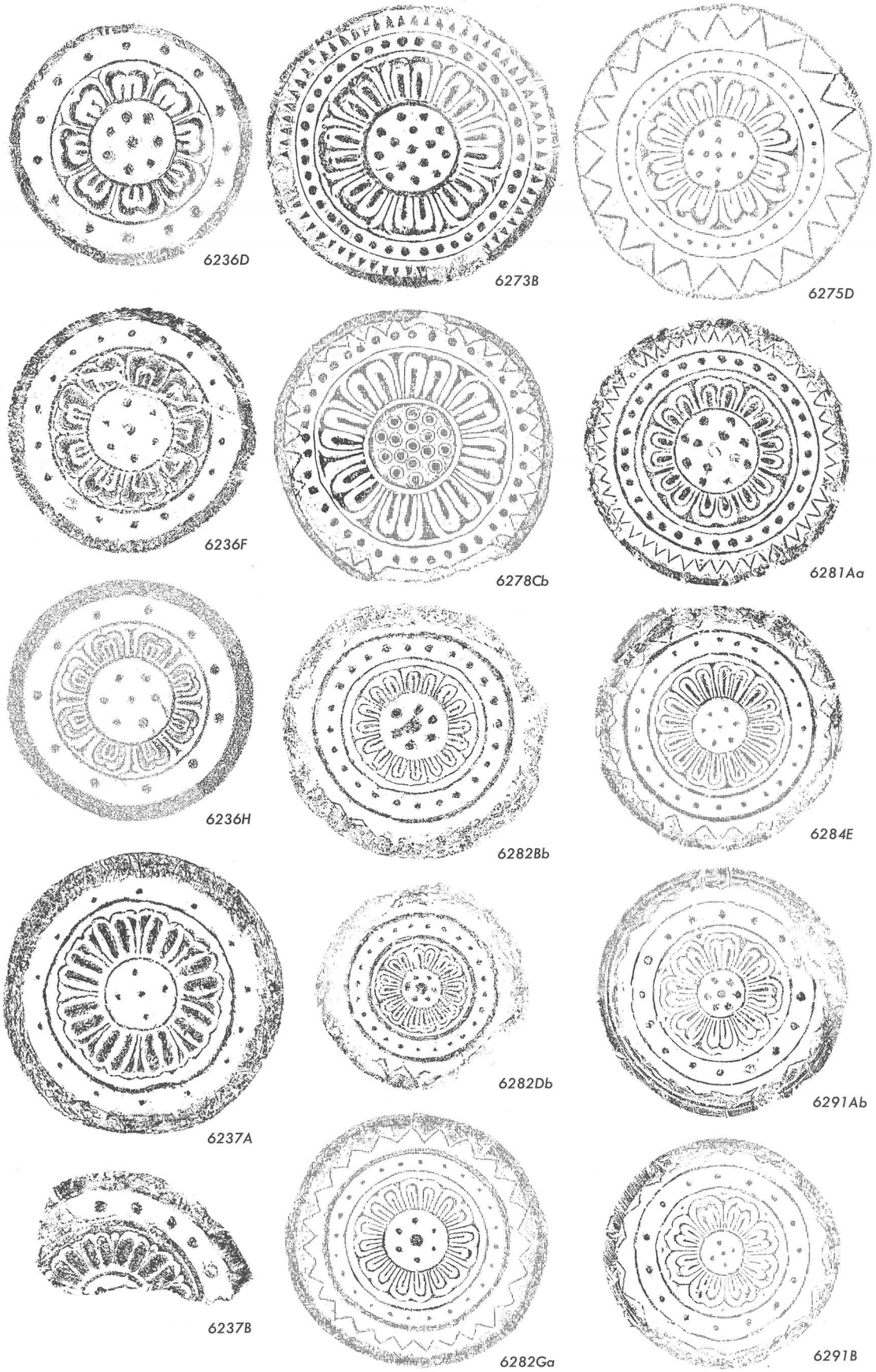

Fig. 32　軒丸瓦拓影 2

縁は珠文、外縁は素文の直立縁Ⅱであるが、高さは比較的低い[1]。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残る（PL.35）。丸瓦部の凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当接合部にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。瓦当裏面は不定方向のナデ調整。概して軟質なものが多く、灰黒～灰白色を呈する。**H種**は、平坦な中房に１＋６の蓮子をおき、まわりに８弁の蓮弁を配する。蓮弁の盛り上がりが大きく、Ａ種に似るが、外側の珠文帯の幅が広い。外縁は素文の直立縁Ｉである。軟質で淡灰黒色を呈し、胎土・焼成ともに西大寺出土資料と近似している。

6237型式　外区内縁に珠文をおき、外縁は素文とするが、内区の蓮弁は子葉が退化して全体に長くふくらんだ形状となる。Ａ種10（９）点、Ｂ種１（１）点が出土。Ｂ種は、食堂地区の調査で出土した新種である。**Ａ種**は、中房蓮子が１＋４、８弁の蓮弁をもつ。外縁は直立縁Ⅱ。蓮子・外区珠文および内外区を分ける圏線が細いものと、太くなったものの二種類があるが、笵に手を加えたものかどうかは不明。前者が４点、後者が３点あり、ほかに判別しがたいものが３点ある。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面にかけてはタテ方向のナデ調整を行う。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残り、その後方に枷型の木目が観察される例がある（PL.35）。焼成は甘く、灰褐～灰黒色を呈する。**Ｂ種**は上半部のみの破片であるが、中房に推定１＋４の蓮子をおき、まわりに10～12弁の蓮弁を配する。外縁は直立縁Ⅱである。丸瓦部凸面にタテ方向のヘラケズリを施す。やや軟質で、灰白色を呈する。

6273～6281は藤原宮式

6273型式　内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁を珠文、外縁を凸鋸歯文とする藤原宮式の軒丸瓦である。**Ｂ種**３（２）点が出土。突出した中房内部に１＋５＋９の蓮子を配する。外縁は三角縁である。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残り、その後方に枷型の「あたり」がある（PL.35）。丸瓦と瓦当の接合部の内外面には、指頭押圧調整を施す（PL.35）。灰色の硬質なものと、軟質で灰黒色のものとがある。

6275型式　内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に粗い線鋸歯文をめぐらす。藤原宮式。**Ｄ種**２（１）点が出土している。突出した中房に１＋４＋８の蓮子を配し、外縁は傾斜の緩い三角縁である。瓦当は薄手で、裏面にナナメ方向のナデ調整を施す。硬質で灰色を呈する。

6278型式　扁平な内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。藤原宮式。**Cb種**１（０）点が出土している。Ca種の蓮子・珠文を深く彫り込んで立体的にしたもの。低く突出した中房に１＋６＋10の蓮子を配し、外縁は傾斜縁Ｉである。瓦当裏面にナナメ方向のナデ調整を行う。ごく硬質で、灰～灰赤褐色を呈する。

6281型式　内区に８弁の蓮弁をおく藤原宮式であるが、間弁は独立せずに界線状に蓮弁の周囲を囲む。外区内縁は珠文、外縁は細かい線鋸歯文である。**Aa種**１（０）点が出土。突出した中房内部に１＋４＋８の蓮子を配し、外縁は三角縁である。文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残る（PL.35）。丸瓦部の凸面調整は、タテ方向のヘラケズリとナデの併用。凹面は瓦当寄りの部分にタテ方向のナデ調整を施す。丸瓦部の成形は粘土紐を用いており、凹面の継ぎ目にヨコナデを加える。瓦当裏面の下半は不定方向のナデののち、タテ方向のヘラケズリ調整。ごく硬質で、灰～暗灰色を呈する。

6282型式　文様の基本的な構成要素は6281型式と共通するが、中心を囲む中房蓮子が一重と

（１）『平城宮報告XIII』は、6236Ｆと次に述べる6237Ａが、ともに外縁上面をヘラケズリするとしている（256頁）が、筆者の観察ではそうした調整痕跡は認められない。笵自体がこうした面を有していたとみるべきである。

なる。Bb 種３（１）点、Db 種２（２）点、Ga 種１（１）点が出土。**Bb 種**は、摩滅した Ba 種の内区文様に手を加えたもの。中房蓮子は１＋６で、中心のものが大きい。外縁は厚みのある傾斜縁Ｉである。接合粘土がごく厚く、瓦当裏面の丸瓦の取り付き部分内側が台形を呈する。軟質で灰黒～灰白色を示す。**Db 種**は小型品。中房蓮子は１＋６で、中心の蓮子が大きい。外縁は厚みのある傾斜縁Ｉである。Da 種の蓮弁を彫り込んだため、中房の外周部が周環状にくぼむ。丸瓦部凸面にはタテ方向のヘラケズリを施す。やや軟質で灰白～灰黒色を呈する。**Ga 種**は全体に中高である。中房の蓮子は１＋６で、やはり中心のものが大きい。外縁は厚みのある傾斜縁Ｉ。軟質で黄灰色を呈する。

6284型式　6282型式とよく似た文様であるが、中心の蓮子が小さい。**E 種**１（０）点が出土[1]。突出した中房内部に１＋６の蓮子をおき、外縁は傾斜縁Ⅱである。文様の地と同じ面に笵端痕跡が残る。瓦当裏面はナナメ方向のナデ調整。比較的硬質で、内部は暗灰～灰白色であるが、表面は燻し焼きにより黒色を呈する。なお、6284E の中房中心蓮子を大きく彫り直したものが、6282Fa であることが明らかになっている[2]。したがって、中心蓮子の部分を欠く本例については、6282Fa の可能性もあるわけだが、表面を黒く燻焼する手法は、平城宮第一次大極殿第Ｉ期に認められる特徴である[3]。よって、この点から6284E とみてよい。

6291型式　内区に８弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。間弁は界線状につながって蓮弁の周囲を囲む。Ａ種２（１）点、Ｂ種１（０）点が出土している。**A 種**のうち１（０）点は Ab 種であり、もう１点は Aa・Ab の区別が不明。直径に比して厚めの瓦当を有する。小型の凸中房の内部に１＋６の蓮子を配し、内区の地が全体に盛り上がる。外縁は傾斜縁Ⅲで、頂部に１条の凸線をもつ。瓦当裏面はタテ～ナナメ方向のヘラケズリ。灰白色を呈し、比較的硬質である。**B 種**[4]は、中房蓮子が１＋４で、Ａ種にくらべると文様が平板である。外縁は厚手の傾斜縁Ｉ。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリを施し、瓦当寄りに一部ヨコ方向のヘラケズリを加える。瓦当接合部の凹面は、不定方向のナデ調整。硬質で淡灰色を呈する。

6301型式　いわゆる興福寺式の軒丸瓦である。内区に照りむくりのある８弁の蓮弁をおき、間弁は独立する。外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。Ｂ種１（１）点、Ｃ種１（１）点が出土している。**B 種**は中房蓮子が１＋５＋９で、外縁は傾斜縁Ｉ。丸瓦部の凸面にタテ方向のヘラケズリを施し、凹面はタテ方向のナデ調整を行う。比較的硬質で、淡橙灰色を呈する。**C 種**は中房蓮子が１＋５＋10、外縁は同じく傾斜縁Ｉである。丸瓦部は凹凸両面にタテ方向のナデ調整を施す。淡青灰色を示し、ごく硬質である。

6304型式　小さな凸中房に１＋６の蓮子をおき、まわりに８弁の蓮弁を配する。間弁は界線状に蓮弁を囲む。外区内縁に珠文、外縁に粗い線鋸歯文をめぐらす。Ａ種１（１）点、Eb 種１（１）点、Ｌ種１（０）点、種別不明１（０）点が出土している。**A 種**は、外縁が傾斜縁Ⅱ。軟質で灰白色を呈する。**Eb 種**も外縁は傾斜縁Ⅱ。瓦当裏面下半にナナメ方向のナデ調整を施す。比較的硬質で、灰黒色（表面）～灰白色（内部）を示す。**L 種**は、鳥衾としての使用が想定される大型品である。やはり外縁は傾斜縁Ⅱ。外縁の上端から約８㎜の位置に笵端痕跡があり、そ

鳥衾用の大型品

（１）『西隆寺報告』では6284C とするが、6284E が正しい。
（２）佐川正敏ほか「平城宮式軒瓦の同笵関係の調査」（『奈良国立文化財研究所年報1992』1993年。
（３）佐川正敏「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える」（『日本中国考古学会会報』第２号）1992年。
（４）『西隆寺報告』で6291A としたものは、6291B である。

高い位置の笵端痕跡

れより後方をタテ方向にヘラケズリする。したがって、笵端は文様の地に比べてかなり高い。瓦当裏面はナナメ方向のナデ調整。比較的硬質で、暗灰色（表面）～灰白色（内部）を呈する。

6307型式　外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をおくが、間弁をもたない。**D種**1（0）点が出土。直径が小振りな反面、瓦当は分厚い。中房蓮子は1＋4、蓮弁は8弁で線的な表現となり、中心に向って高まる。外縁は傾斜縁Ⅰ。横置きの成形台を使用し、瓦当部の粘土を積み上げた一本造りである。瓦当裏面は無調整で、成形台にかぶせた布目が残り、粘土の積み上げ痕跡が認められる（PL.35）。ごく硬質で、青灰色を呈する。

6308型式　低く突出した中房のまわりに8弁の蓮弁をおき、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。間弁は独立する形式である。B種1（0）点、C種2（1）点が出土。**B種**[1]は、中房蓮子が1＋6、外縁は低い傾斜縁Ⅱである。丸瓦の接合痕跡がなく、積み上げた粘土が剝離した状況を示す。横置きの成形台を使用した一本造りと考えられる。丸瓦部凸面にタテ方向、凹面にタテ～ナナメ方向のナデ調整を行う。比較的硬質で、淡灰色を呈する。**C種**は、中房蓮子が1＋6、外縁は傾斜縁Ⅱであるが、上部の平坦面の幅が広い。弁央と間弁の外側に楔形の突起を有する。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面から瓦当裏面にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。断面に丸瓦を接合した痕跡がなく、B種と同様の成形台一本造りと推定される。ただし粘土の積み上げ痕跡は認められない。淡灰～淡灰褐色を示し、比較的硬質である。

6311型式　6308型式によく似るが、中房が突出せず、圏線で画される。また、概して蓮弁の照りむくりが大きく、外区の珠文と線鋸歯文が細かい。Ba種2（1）点、F種2（2）点が出土。**Ba種**は、中房蓮子が1＋6、外縁は高い傾斜縁Ⅱである。丸瓦部外面にタテ方向のヘラケズリないしナデ、凹面にタテ方向のナデ調整を施す。軟質で、灰白～灰褐色を呈する。**F種**は、外区の珠文と線鋸歯文が粗く、6308型式に近い。中房蓮子が1＋6、外縁は傾斜縁Ⅱである。丸瓦部から瓦当にかけての部分が分厚く、積み上げた粘土が剝離したものがみられる。横置きの成形台を使用した一本造りであろう。比較的硬質で、灰褐～淡灰色を示す。

壹棟所用の小型品

6313型式　壹棟所用と考えられる小型の軒丸瓦である。中房に大粒の蓮子を1個おき、まわりに4弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は線鋸歯文である。Aa種2（1）点、H種2（1）点が出土。**Aa種**は間弁が独立し、外縁は傾斜縁Ⅱである。青灰色の硬質のものと、黄灰色の軟質のものとがある。**H種**[2]は、間弁が連続した界線状となって蓮弁を囲む。外縁は厚手の傾斜縁Ⅰで、上端に1条の凸線がめぐる。また、文様の地と同じ高さに笵端痕跡が残る。丸瓦部凸面はタテヨコ両方向のナデ、瓦当裏面はナナメ方向のナデ調整が施される。淡灰～暗灰色を示し、比較的硬質である。

6316型式　間弁と蓮弁中央の凸線がなく、分離した子葉を輪郭線で囲む。**K種**[3]3（2）点が出土。圏線で区画した中房内部に1＋8の蓮子をおき、まわりに9弁の蓮弁を配する。外区内縁は珠文、外縁は線鋸歯文であるが、外縁形態が直立縁Ⅱのため、後者は不明瞭である。丸瓦部凸面にタテ方向のヘラケズリを施す。淡灰色の比較的硬質なものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものとがある。

（1）『西隆寺報告』では6308Aとするが、6308Bが正しい。
（2）『西隆寺報告』では6314としていたもの。その後型式設定を変更した。
（3）『西隆寺報告』では6316Dbとするが、Dbは中房が突出する点で異なる。ただし、笵を彫り直した可能性がある。

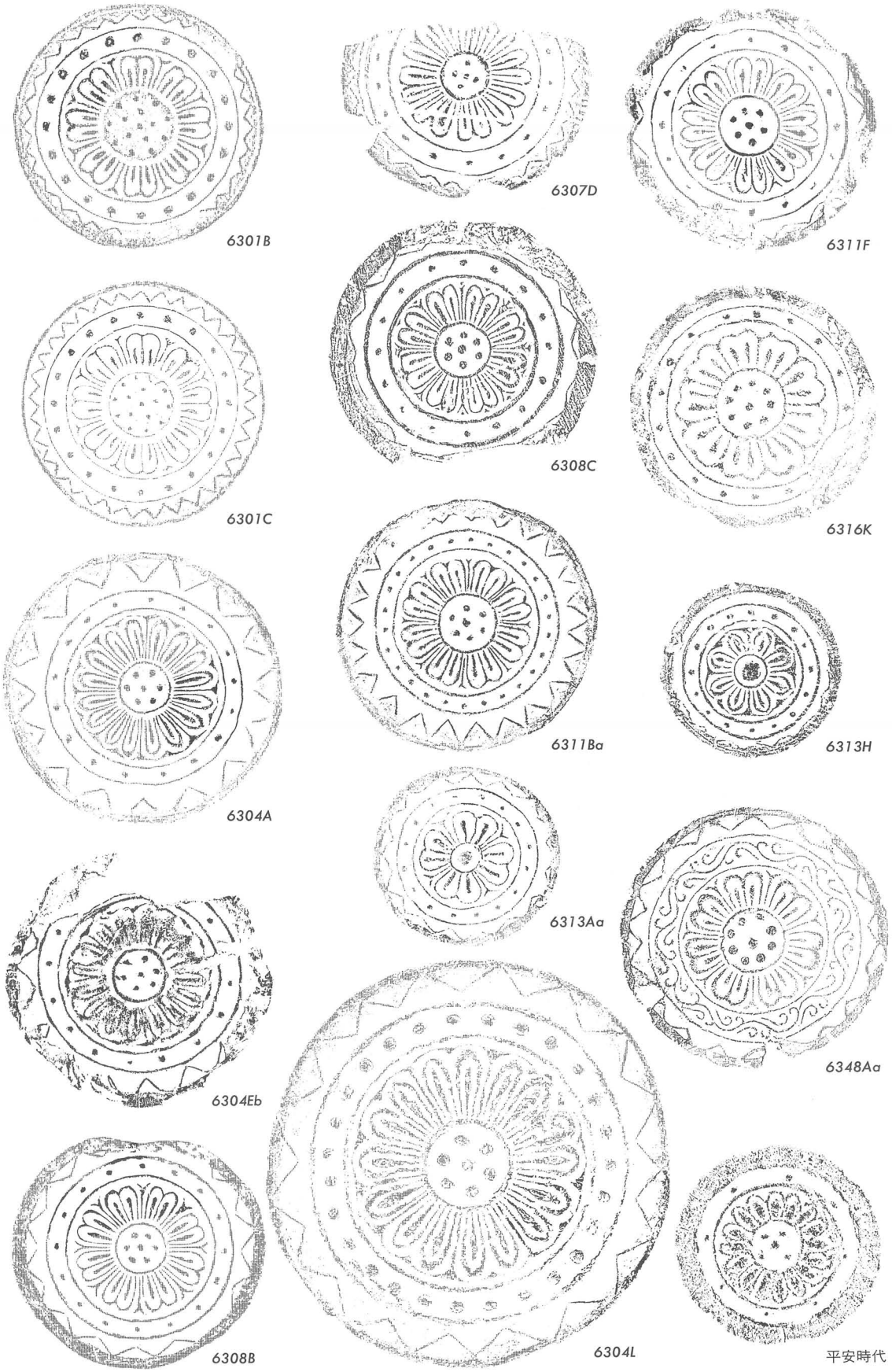

Fig. 33　軒丸瓦拓影 3

6348型式　外区内縁に唐草文、外縁に線鋸歯文をめぐらす。**Aa種**1(1)点が出土し、ほかにAa・Abの区別がつかないものが3(3)点ある。突出した中房に1＋8の蓮子をおき、まわりに7弁の蓮弁を配する。外縁は緩い傾斜縁Ⅰ。文様の地と同じ高さに、笵端の痕跡が残る(PL.35)。丸瓦部凸面はタテ方向のヘラケズリ、瓦当裏面はナナメ～ヨコ方向のナデ調整を行う。暗灰～灰褐色を示す硬質なものと、軟質で灰白～淡橙灰色を呈するものとがある。

Ⅲ　平安時代の軒丸瓦

平安時代前期の軒丸瓦が1(1)点出土している。圏線で囲んだ中房内部に1＋5の蓮子をおき、まわりに16弁の単弁蓮華文を配する。複弁8弁が変化したものであろう。間弁はなく、蓮弁が相互に接する。外区内縁にまばらな珠文をめぐらし、外縁は素文で、広い直立縁Ⅱである。瓦当のほぼ全周にわたって笵端痕跡が残る(PL.35)。笵端の位置は、文様の地と同じ高さである。軟質で、灰黒～灰白色を呈する。

B　軒　平　瓦(PL.36～42, Fig.36～38)

軒平瓦は471(218)点出土している。このうち型式が判明するものは448(206)点あり、28型式44種に分けることができる。すべて奈良時代に属する。軒平瓦の顎形態は、段顎・直線顎・曲線顎の三つに大別されるが、軒丸瓦の外縁形態と同じく『平城宮報告報告XⅢ』にしたがって、以下のように分類した(Fig.34)。

顎形態の分類

段顎ⅠL　顎面と平瓦部の段差が大きく、顎の長さが瓦当の厚さを越えるもの

段顎ⅠS　顎面と平瓦部の段差が大きく、顎の長さは瓦当厚とほぼ同じかそれ以下のもの

段顎Ⅱ　顎面と平瓦部の段差が小さく、直線顎に近いもの

直線顎　平瓦部凸面から瓦当面まで直線的にのびるもの

曲線顎Ⅰ　平瓦部凸面から瓦当面まで連続した曲線をなし、明確な顎面をもたないもの

曲線顎Ⅱ　曲線顎のうち、平瓦部凸面の瓦当沿いに明確な顎面をもつもの

Ⅰ　幾何学文軒平瓦

6543型式　**A種**1(0)点が出土。笵型を用いず、瓦当面をヨコナデしたのち、ヘラによって格子文様を描く。施文順序は、右上がりの平行沈線が先、左上がりの平行沈線が後である。曲

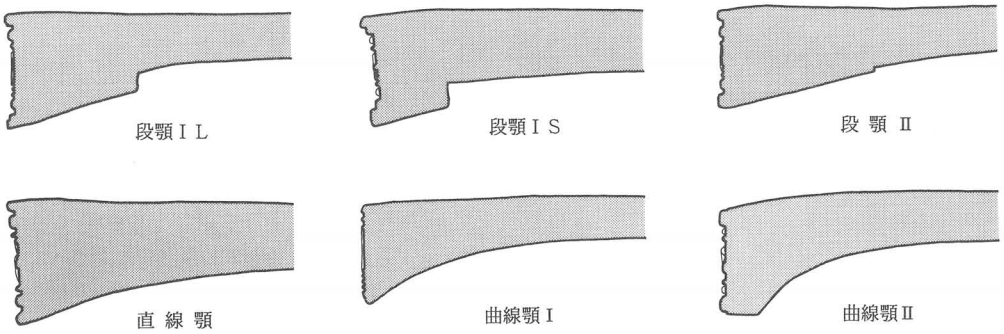

Fig. 34　軒平瓦の顎形態の分類

線顎Ⅱだが、顎面から平瓦部凸面にかけての屈曲は弱い。凸面調整はタテ方向のヘラケズリで、瓦当付近は凹凸両面にヨコ方向のヘラケズリを加える。青灰色を示し、硬質である。

Ⅱ　偏行唐草文軒平瓦

6641型式　内区に左から右へ流れる偏行唐草文をおき、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配する藤原宮式。C種6(5)点、E種1(0)点が出土している。ともに平瓦の凸面に顎部の粘土を貼りつけ、次いで段を削りだした「貼りつけ削り出し段顎[1]」である。**C種**は段顎**IL**。凸面はタテ方向のヘラケズリののち、顎部とその付近にヨコ方向のナデ調整を施す。凹面調整はタテ方向のナデを主体とし、瓦当近くにヨコナデを加える。暗灰色の硬質なものと、やや軟質で灰白～灰黒色を呈するものとがある。**E種**も段顎**IL**。顎部はヨコナデ、凹面の瓦当寄りはヨコ方向のヘラケズリを施す。硬質で青灰色を呈する。

6641～6643は藤原宮式

6642型式　内区に左から右へ流れる偏行唐草文をおき、外区と脇区はいずれも珠文とする。藤原宮式。**A種**1(1)点が出土している。貼りつけ削り出しによる段顎**IL**である。顎部にヨコナデ、凹面の瓦当寄りにヨコ方向のヘラケズリを行う。比較的硬質で青灰褐色を示す。

6643型式　6642型式の内区の偏行唐草文の向きが逆転したもの。C種1(0)点、D種2(2)点が出土している。ともに貼りつけ削り出しによる段顎**IL**である。**C種**は、平瓦部がごく薄く、凸面にヨコナデ、凹面の瓦当近くにヨコ方向のヘラケズリを施す。凸面にはわずかにタテの縄叩きが残る。比較的硬質で、淡橙灰色を呈する。**D種**は、瓦当面の左端に顕著な笵割れがある。凸面調整はヨコナデ、凹面の瓦当寄りにヨコ方向のヘラケズリを行う。暗灰～灰白色を示し、比較的硬質である。

6652型式　内区に右から左へ流れる偏行唐草文をおき、外区と脇区はいずれも珠文とする。**A種**3(3)点が出土。いずれも段顎**IS**である。笵の大きさが瓦当面よりひとまわり小さく、外縁に段差を生じている。凸面はタテ方向の縄叩きののち、顎部とその付近にヨコナデを施す。凹面は全面をタテ方向にナデ調整し、瓦当近くにヨコナデを加える。側面には、成形の際の糸切痕が残る（PL.40)。比較的硬質で淡灰～灰白色を呈する。法隆寺や押熊瓦窯などから同笵資料が出土しており、顎形態は法隆寺のもの[2]が段顎**IS**、押熊瓦窯のものが直線顎である。笵傷の上では先後関係を確認できないが、前者から後者への移行が想定される。

Ⅲ　均整唐草文軒平瓦

6663型式　花頭形の垂飾りを上向きのC字形中心葉で囲む。唐草は3回反転で、外区を圏線文とする。A種15(13)点、B種2(1)点、C種15(8)点、F種1(1)点、I種1(1)点、種別不明のもの3(3)点が出土。**A種**は、顎形態を知りうる11点のうち、8点が曲線顎Ⅰ、3点が曲線顎Ⅱである。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。凸面は、タテの縄叩きののち瓦当寄りの部分をヨコナデし、曲線顎Ⅱの資料は、さらにヨコ方向のヘラケズリを行って狭い顎面を作り出す。凹面は、タテ方向のナデにつづいて、瓦当近くにヨコナデを加える。側面に成形時の糸切痕を残すものが多い（PL.40)。また、両側縁の上端を焼成後に打ち欠く例がしばしばみ

6625と組む6663型式

(1)　奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』1978年、90頁。

(2)　法隆寺227A。毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝　瓦』（昭和資財帳15）小学館 1992年。

られる（PL.40）。A 種の曲率が大きいため、屋根を葺く際に支障となった部分を打ち欠いたものと推定される。比較的硬質で、灰～暗灰色を呈する。**B 種**は、曲線顎Ⅰと曲線顎Ⅱが１点ずつある。やはり笵の大きさが瓦当面に比べて小さい。凸面にはタテの縄叩きが残り、瓦当寄りの両面をヨコナデする。淡灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白色を示すものとがある。**C 種**は、Cb と確定できるのは３点にすぎないが、顎形態を知りうるものは全て曲線顎Ⅱであることから、いずれも Cb と推定される。凸面は、タテの縄叩きののち瓦当寄りをヨコナデし、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を形成する。凹面には、広くヨコナデ調整を施す。側縁の上端を焼成後に打ち欠き、凹面に凸型台の木目を残す例がある（PL.40, Fig.35）。この木目がヨコナデ調整の上に重複することから、まず凸型台上で成形したのち、おそらく凹型台を用いて凹面調整を行い、再度凸型台の上にのせたものと推定される。凸面ないし側面の調整のためであろう。灰～暗灰色の比較的硬質なものと、灰白色の軟質なものがあるが、後者が多い。**F 種**は、幅約1.4㎝と比較的広い顎面をもつ曲線顎Ⅱ。凸面調整は、瓦当からやや離れた位置にタテ方向のナデ、瓦当近くにヨコナデを施し、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を作り出す。凹面の瓦当寄りは、ヨコ方向のヘラケズリ。比較的硬質で灰白～灰黒色を呈する。**I 種**は直線顎である。凸面はタテ方向の縄叩きののち、瓦当寄りの部分をヨコナデする。凹面は、瓦当近くにヨコ方向のヘラケズリを施す。側面に凸型成形台の立ち上がりの端部があらわれており、成形が一枚作りによることを明瞭に示している。成形台の幅が瓦の幅に比べてやや小さいために、段差が生じたものである。軟質で灰黒色を示す。

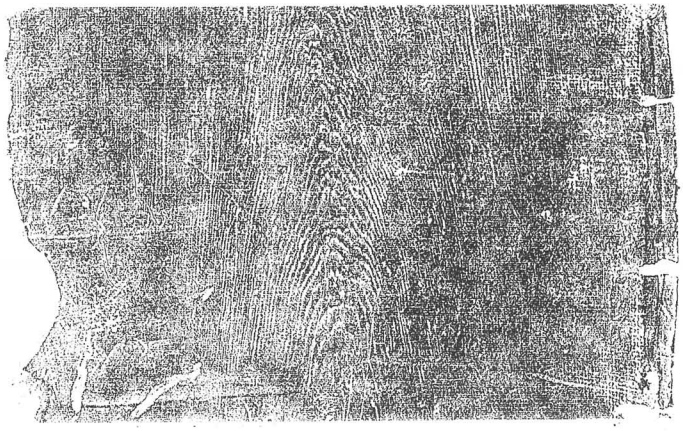

Fig. 35　6663Cの凹面拓影　1：3

凸型台の木目痕

6664型式　内区文様は6663型式と共通するが、外区を珠文とする。C 種７（６）点、D 種１（０）点、Ga 種１（１）点、I 種１（０）点、K 種２（１）点、種別不明２（１）点が出土している。いずれも、笵の大きさが瓦当面よりも小さい。**C 種**は段顎 **IL**。側面に糸切痕の残る例があり（PL.40）、この個体は、平瓦部の厚さが中央部で薄く、側縁に近い部分で厚くなっている。糸切痕の存在とあわせて、製作が一枚作りによることを示すものとみられる。凸面の平瓦部にはヨコの縄叩きが行われており、顎部付近をヨコナデする。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。やや軟質で、内部は灰白色だが、表面は炭素の吸着により黒～灰黒色を呈する。**D 種**は段顎 **IS** であり、顎部にはヨコナデを行う。軟質で灰白色を示す。**Ga 種**は、段顎 **IL** である。瓦当厚はほぼ一定だが、C 種と同様に平瓦部が中央で薄く、両側縁に近い部分で極端に厚くなる。一枚作りであろう。本例の側面調整はヘラケズリであるが、平城宮第一次大極殿院出土の同笵例では側面に糸切痕を残している[(1)]。平瓦部凸面はヨコ方向の縄叩きで、顎部付近にヨコナデを施す。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。やや軟質で、灰白色を示す。**I 種**は顎部が剝離する

（１）『平城宮報告Ⅻ』に指摘がある（306頁）。

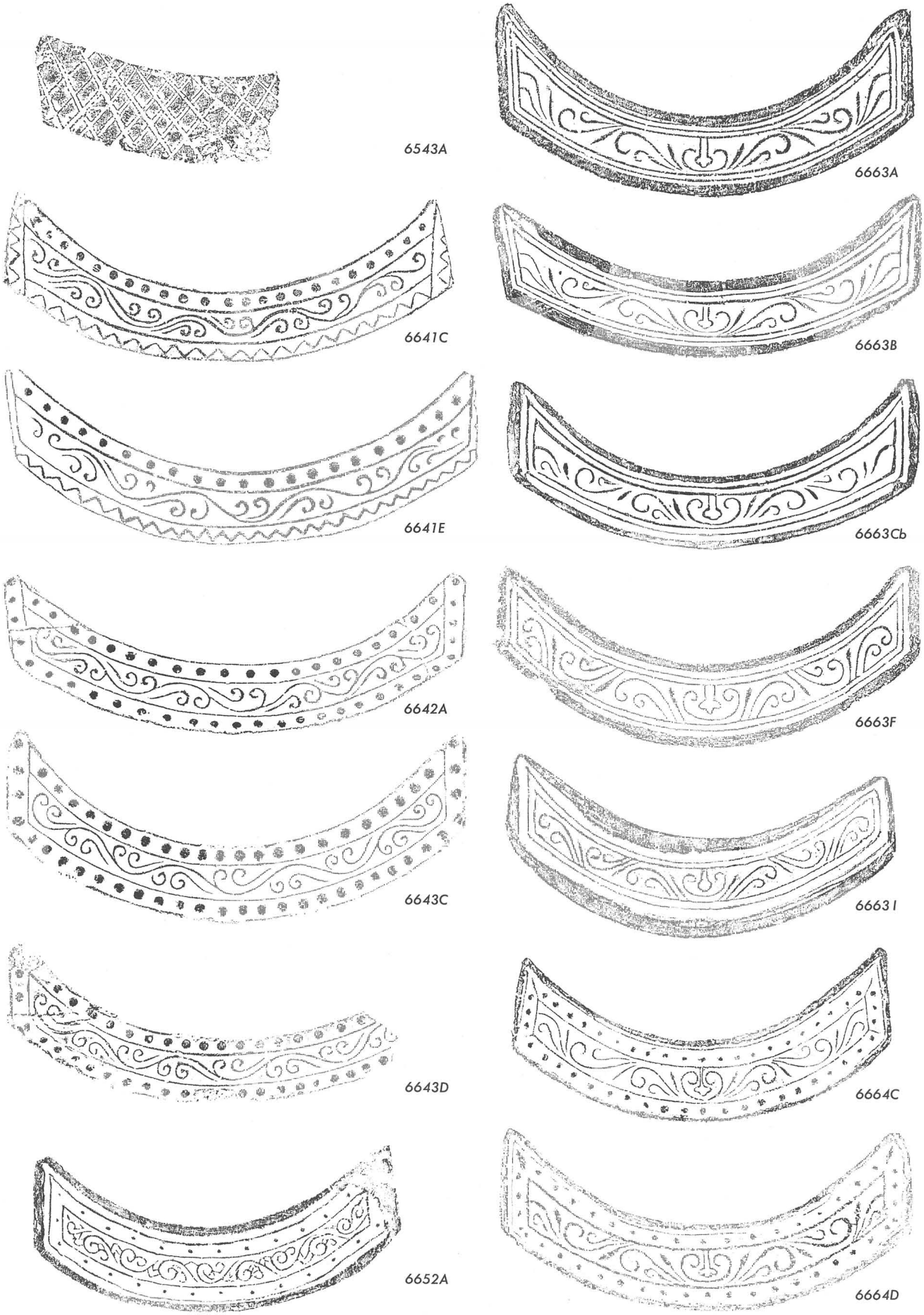

Fig. 36　軒平瓦拓影 1

が、段顎ILであろう。凹面の瓦当付近をヨコ方向にヘラケズリする。模骨痕がわずかに残っており、桶巻作りと考えられる。京都府木津町の瀬後谷遺跡から同笵例が出土しているが、その製作は粘土紐桶巻作りによっている[1]。灰白～灰黒色を呈し、軟質である。**K種**も段顎IL。顎部は剝離しているが、剝離面に糸切痕が認められるものがある。本例では不明であるが、平城宮出土の同笵資料には明確な模骨痕をもつ例があり、粘土板桶巻作りと推定される。やや軟質で、灰白～灰黒色を示す。

6665型式　6664型式に類似するが、唐草文第3単位の主葉が巻き込み、脇区界線に取りつかない。**A種**1(0)点が出土。段顎ILである。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。平瓦部凸面はヨコ方向の縄叩きを行い、顎部をヨコナデする。凹面はナナメ方向のナデ調整で、瓦当付近にヨコ方向のヘラケズリを加える。灰色を呈し、比較的硬質である。

6668型式　6664型式に似るが、やや小型で、中心飾りの花頭形の両端が尖る。**A種**2(0)点が出土。段顎ILである。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。平瓦部凸面は細かいタテの縄叩きを行い、顎部をヨコナデする。凹面にはヨコ方向のヘラケズリを施す。暗灰色を示し、ごく硬質である。同笵資料が京都府瀬後谷遺跡から出土しているが、それらは粘土紐桶巻作りによる。左右の唐草文第1単位に笵割れを生じたものと、それがないものの二種類があるが、本例は瓦当遺存部がちょうど二つの笵割れにはさまれた部分に一致し、前者の段階と考えられる。

6675型式　「个」字形を上向きの中心葉で囲む。唐草は4回反転で、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文を配する。**A種**1(1)点が出土。段顎ILである。顎部にヨコナデ、凹面は瓦当寄りの部分にヨコ方向のヘラケズリを施す。暗灰色を呈し、ごく硬質である。

6681型式　中心の垂飾りの縦線が1本で、外区を圏線文とする。唐草は3回反転。**B種**[2]2(1)点が出土している。直線顎である。笵の大きさが瓦当面よりかなり小さく、外縁に明瞭な段差を有する。凸面はタテ方向のナデ調整で、瓦当近くに一部ヨコナデを加える。凹面はヨコ方向のヘラケズリ。淡灰褐色の比較的硬質のものと、軟質で灰白色を呈するものとがある。

6682型式　内区文様は6681型式と共通するが、外区を珠文とする。**A種**1(1)点が出土。段顎ISである。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。顎部にヨコナデ、凹面にヨコ方向のヘラケズリを施す。暗灰色を示し、比較的硬質である。

6685型式　文様構成は6682型式に近いが、小型で、唐草文の第3単位がともに脇区界線に取りつく。B種[3]1(0)点、C種3(3)点が出土。**B種**は段顎IS。平瓦部凸面はタテの縄叩きを行い、顎部にヨコ方向のナデないしヘラケズリを施す。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。比較的硬質で、灰色を呈する。**C種**も段顎ISである。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。平瓦部凸面はタテの縄叩きで、顎部にヨコナデを加える。凹面はナデ調整。側面に糸切痕が残る例がみられる。淡灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものとがある。

壹棟所用の小型品

6691型式　花頭形垂飾りの軸部が1本となる4回反転の均整唐草文。A種4(2)点、D種1(1)点が出土している。**A種**は曲線顎II。笵の大きさが瓦当面よりも小さい。顎面の幅が約7㎜と狭いものと、15㎜ほどの広いものがある。前者の凸面調整はタテ方向のヘラケズリで、ヨ

(1)『木津町瀬後谷遺跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター現地説明会資料　№91－13　1991年。石井清司氏のご厚意により、後述の6668Aとあわせて実見の機会を得た。

(2)『西隆寺報告』では6681Aとするが、6681Bが正しい。

(3)『西隆寺報告』では6685Aとするが、6685Bが正しい。

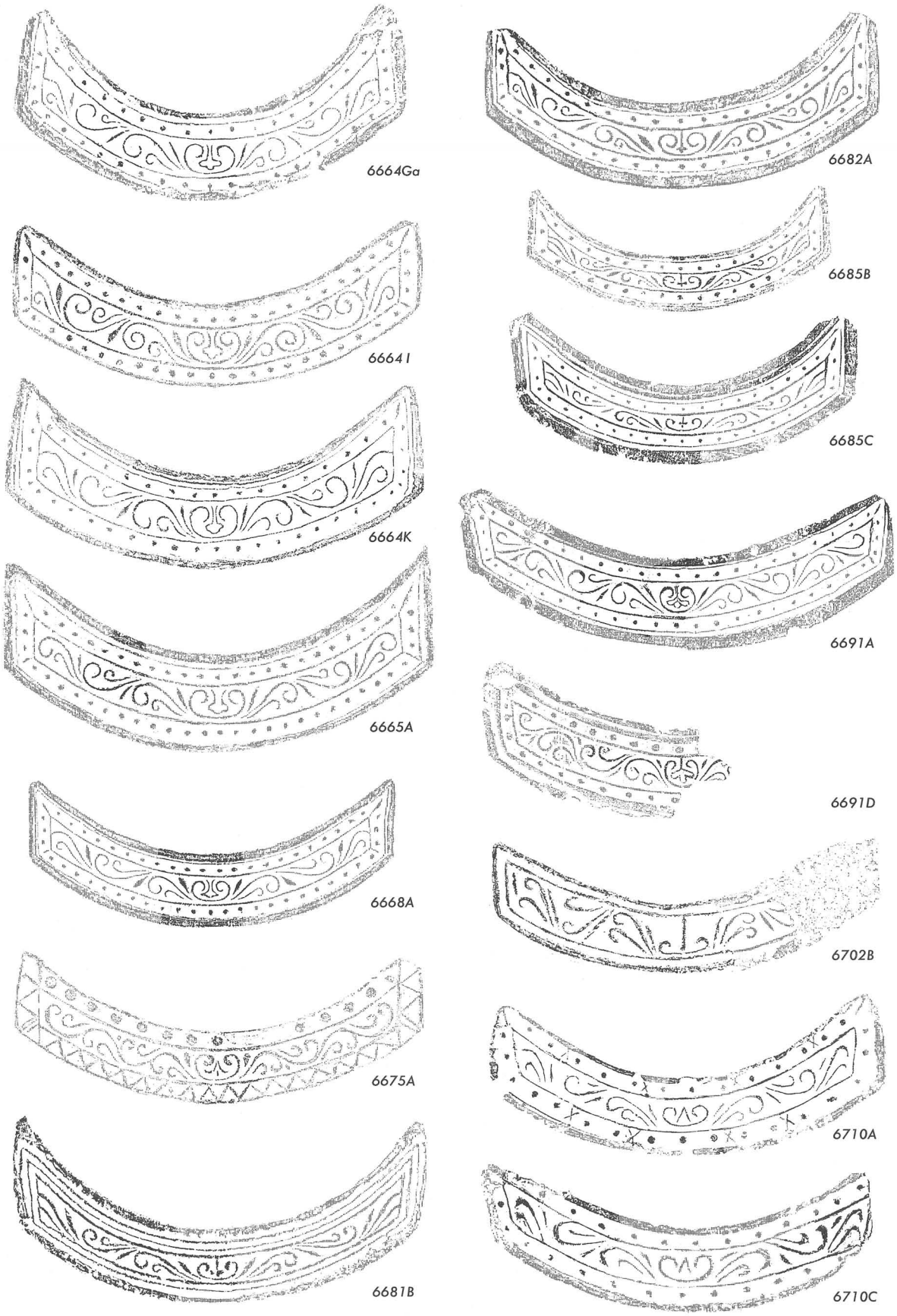

Fig. 37　軒平瓦拓影 2

コ方向のヘラケズリにより顎面を作り出す。凹面はヨコ方向のナデ調整。後者は平瓦部凸面にタテの縄叩きを行ったのち、タテ方向のナデ調整を施し、さらに瓦当寄りに広くヨコナデを加える。凹面はヨコ方向のヘラケズリである。青灰色の硬質のものと、軟質で灰白～灰褐色を呈するものがみられる。**D種**は瓦当中央部の小片である。硬質で淡灰色を示す。

6702型式　内区文様は6681型式に近いが、外区の圏線文を欠く。また唐草文の第3単位は、主葉と第1支葉がともに巻き込んで、脇区界線に取りつかない。**B種**1（1）点が出土。きわめて顎面の広い曲線顎Ⅱである。凸面はタテの縄叩きの後、タテ方向のヘラケズリを施し、さらにヨコ方向のヘラケズリを加えて顎面を作り出す。凹面は、瓦当寄りの部分にヨコ方向のヘラケズリを行う。比較的硬質で淡灰色を呈する。

6710型式　逆Ｖ字形を上向きの中心葉で囲む中心飾りをもつ。唐草は3回反転で、外区を珠文とする。Ａ種5（4）点、Ｃ種3（0）点が出土。**A種**は、上外区と下外区の珠文の間に、各4個の「×」を入れる。直線顎である[1]。凸面はタテ方向のヘラケズリののち、瓦当寄りの一部にヨコナデを加える。凹面はヨコ方向のヘラケズリ調整。比較的硬質で、灰黒色～淡灰色を示す。**C種**も直線顎。摩滅のため不明瞭であるが、凹凸両面の瓦当近くにヨコ方向の調整を加える。灰白～淡灰黒色を呈し、軟質である。

6721型式　「小」字形の三葉文を、左右に分離した中心葉が囲む中心飾りをもつ。唐草は5回反転で、外区に細かい珠文を配する。Ｃ種7（3）点、Ｄ種3（0）点、Gb種3（2）点、Hb種2（1）点、種別不明2（2）点が出土している。**C種**は曲線顎Ⅱ。外縁の外側の凹凸両面に笵端痕跡が認められ、瓦当面に笵押捺以前の細かい布目が残る例がある（PL.40）。笵端の位置は、文様の地と一致する。凸面はナナメの縄叩きののち、タテ方向のナデまたはヘラケズリを加え、さらにヨコ方向のヘラケズリによって顎面を作り出す。凹面はヨコ方向のナデないしヘラケズリ調整。側面に、凹面から連続する布目を残す例がみられる（PL.40）。暗灰色の比較的硬質なものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものがある。**D種**も曲線顎Ⅱである。Ｃ種に比べて顎面の幅が広い。同じく外縁の外側の凹凸両面に、文様の地と同じ高さで笵端痕跡が認められる（PL.40）。凸面はタテ方向のヘラケズリで、顎面と凹面の瓦当近くはヨコ方向のヘラケズリ調整。暗灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白色を呈するものがある。**Gb種**は直線顎である。凸面はタテ方向のヘラケズリが瓦当まで及ぶ。凹面の瓦当寄りはヨコ方向のヘラケズリ調整。硬質で淡灰色を示す。**Hb種**は曲線顎Ⅰ。6721Haが直線顎であるのに対し、6721Hbが曲線顎Ⅱの形態をとることが指摘されている[2]が、後者の中に、そうした顎面の広い曲線顎Ⅱとは別に、明確な顎面をもたない例も存在することを示すものである。凸面はタテ方向のヘラケズリ、凹面は瓦当近くにヨコ方向のヘラケズリを施す。また、凹面に文様の地と同じ高さで笵端痕跡が残る。やや軟質で灰白色を呈する。

外縁外側の笵端痕跡

6727型式　基部が連接した三葉文を上向きの中心葉で囲んだ中心飾りをもつ。唐草文は3回反転で、外区を珠文とする。**B種**3（0）点が出土。いずれも段顎**IS**である。平瓦部の凸面に、粘土を貼り足した状況がよくわかる（PL.41）。貼付粘土は中央部が薄く、側縁に近い部分で厚くなっている。側面と顎部外面に同様の糸切痕を残す例があり（PL.41）、後者は凸型台上

（1）『西隆寺報告』は、6710A・Ｃをともに段顎とする（38頁）が、誤りである。

（2）『平城宮報告XIII』302～303頁。

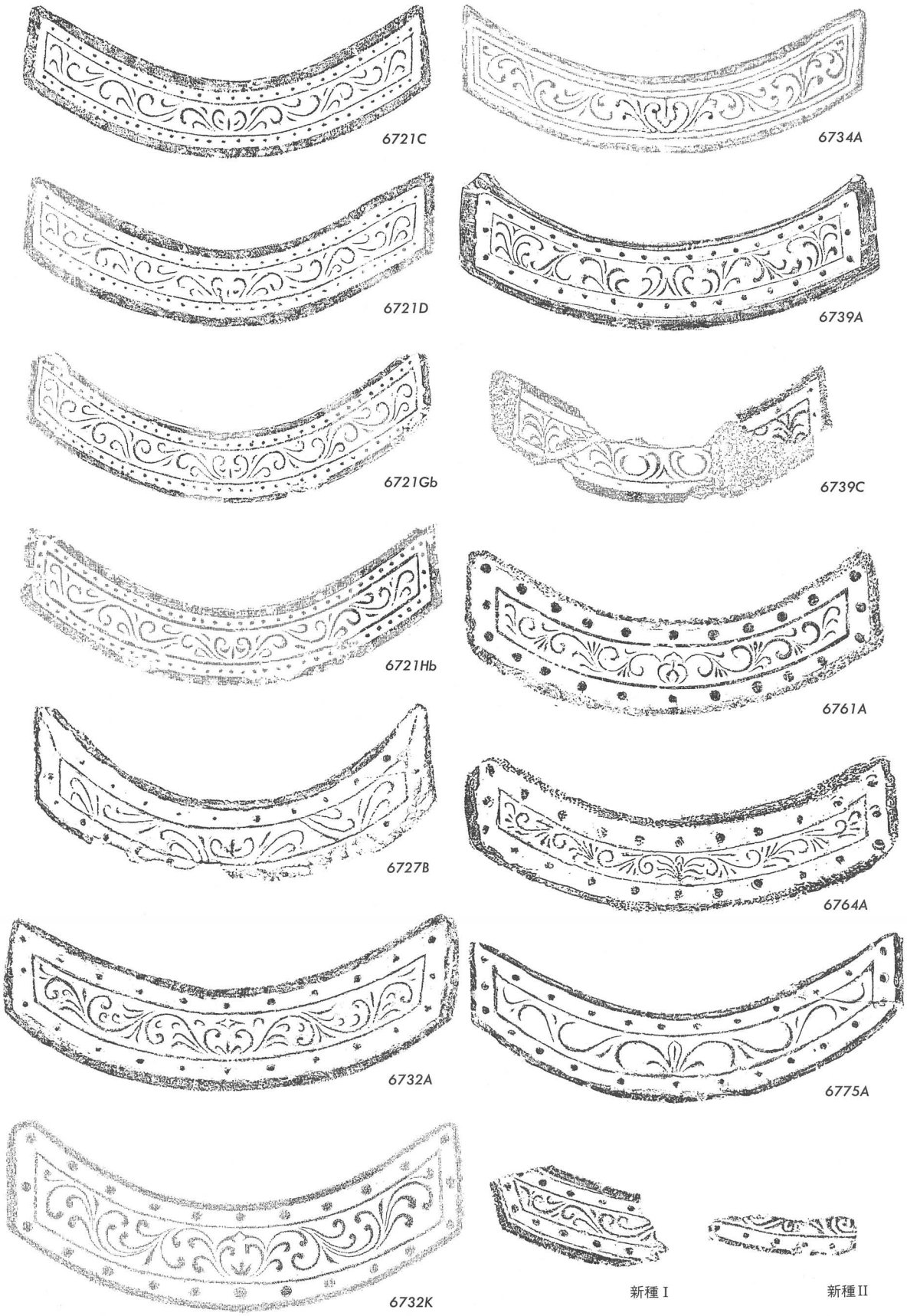

Fig. 38　軒平瓦拓影 3

で顎部を削りだした際の痕跡と考えられる。また側面の糸切痕に先行して、側縁の凹面側を面取りする例が認められる。この場合は凹型台上の作業と推定されるので、凸型台から凹型台に移して成形と調整を行ったのであろう。平瓦部凸面にはタテの粗い縄叩きが残り、顎部はヨコナデ調整。凹面の瓦当近くには、板の木口などを用いたとみられるナナメ方向の調整を施し、その後タテまたはヨコ方向のヘラケズリを加えている。青灰色のごく硬質のものと、いくぶん軟質で灰白〜淡灰褐色を示すものとがある。

6732型式　いわゆる東大寺式の軒平瓦である。中心飾りは、三葉文を上向きの中心葉で囲み、その上に松葉状の対葉をおく。唐草は3回反転で、外区は珠文とする。A種4(4)点、K種1(1)点が出土。**A種**は、顎面の幅が広い曲線顎Ⅱである。笵の大きさが瓦当面より小さく、外縁に段差を有する。平瓦部凸面にはタテの縄叩きを行い、瓦当寄りの部分をヨコナデする。凹面の瓦当近くはヨコ方向のヘラケズリ調整。やや軟質で灰白〜灰黒色を呈する。**K種**は直線顎である。凸面はタテ方向のヘラケズリが瓦当までおよび、凹面の瓦当寄りの部分にヨコ方向のヘラケズリを施す。硬質で灰黒〜淡灰褐色を呈する。大粒の砂粒を含む粗い胎土をもち、技法的特徴とあわせて、西大寺出土の同笵資料と強い共通性を示す。

6734型式　下向きの桐葉形を上向きの中心葉で囲んだ中心飾りをもつ。唐草は3回反転で、6732型式とよく似た特徴を備えるが、外区は圏線文とする。**A種**1(1)点が出土。中心飾りの部分の小片である。砂粒を多量に含む粗い胎土をもち、やや軟質で橙灰色を呈する。

6739型式　左右各3葉の唐草を背中合わせにした中心飾りを有する。唐草は3回反転で、外区に珠文をおく。A種13(7)点、C種2(0)点が出土。**A種**は、隅木蓋瓦に転用したもの1(0)点を含む(PL.43-4)。顎形態は曲線顎Ⅱである。凸面は細かいタテの縄叩きで、瓦当寄りに広くタテ方向のヘラケズリを施したのち、ヨコ方向のヘラケズリによって顎面を作り出す。凹面は、瓦当に近い部分にヨコ方向のヘラケズリ調整を加える。側面に、凹面から連続する布目を残す例がみられる(PL.41)。暗灰色の硬質のものと、軟質で灰白〜灰黒色を示すものがある。**C種**は小型品で、珠文も小粒である。中心と右端部の小片が出土。直線顎である。凸面は、全体にタテ方向のヘラケズリを行ったのち、瓦当寄りの一部に軽くヨコ方向のヘラケズリを加える。やや軟質で灰白色を呈する。

6761型式　桃実形の中心飾りの両側に、5回反転の唐草文を配する。唐草文の第2支葉が3葉構成となるのが特徴である。外区は珠文とするが、珠文帯の地がまるく盛り上がる。**A種**224(80)点が出土。軒瓦全体の中で群を抜いた数量を示し、型式の判明する軒平瓦の50.0%(軒平瓦総数の47.6%)に達する。曲線顎Ⅱと直線顎の二種類があり、凸面に縄叩きを行うものと、叩きを行わずタテ方向のヘラケズリを主体とするものに大別される。瓦当面の笵傷の進行状況によって第Ⅰ〜第Ⅲ段階に区分することができ、それに対応するかたちで顎形態や調整手法の変化をたどることが可能であるが、この点については後述する。凹面調整は瓦当寄りの部分に限られ、いずれもヨコ方向のヘラケズリである。淡灰〜暗灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白〜灰黒色を呈するものがある。なお、中門・南大門地区から1(0)点、隅軒平瓦が出土している(PL.43-8)。右半部の破片で、隅棟の向って左側に使用されたもの。少なくともどちらかの門が、入母屋または寄棟の屋根構造であったことを示すものとみられる。焼成前にヘラで平瓦部をナナメに切り落としている。顎形態は直線顎である。凸面はタテ〜ナナメ方

西隆寺で最も多い軒平瓦

隅軒平瓦

向、凹面はヨコ方向のヘラケズリを施す。

6764型式　上向きの単弁文の左右に、各3葉の小葉を配した中心飾りをもつ。唐草文は5回反転で、第2支葉は6761型式と同じく3葉構成である。平坦で幅広い外区に珠文をめぐらす。**A種**46(24)点が出土しており[1]、軒平瓦としての出土量は6761型式に次ぐ。すべて曲線顎Ⅱで、顎面の幅は広めだが、顎面から平瓦部にかけての屈曲が比較的強い。凸面の茅負の外方にあたる部分にタテ方向のヘラケズリを施し、顎部付近はさらにヨコナデを加える。ヘラケズリの行われない部分には、タテの縄叩きののち瓦当寄りの小範囲にヨコの縄叩きを重ねている例が大半である（PL.41）。ただし、ヨコの縄叩きの範囲が広く、残存部についてはタテの縄叩きが認められない例もある（PL.41）。淡灰色の比較的硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものがあるが、後者の比率が高い。

出土量の多い6764

6775型式　上向きの単弁文を中央におく三葉文を中心飾りとする。唐草文は4回反転で、外区に珠文を配する。**A種**44(18)点が出土しており、6764型式にほぼ匹敵する。顎形態には、曲線顎Ⅱと直線顎の両者がある（PL.41）。前者は、顎面と平瓦部の境界が、ヨコ方向のヘラケズリによって明確な稜をなすものと、不明確なものに分れる。顎面の幅は比較的広い。ただし、平瓦部は瓦当から最大25㎝離れた部分まで確認できるが、縄叩きを残す例は皆無である。いずれも、凸面全体をタテ方向のヘラケズリによって調整したのち、茅負の外に出る部分に広くヨコナデを施している。凹面は、瓦当近くの小範囲をヨコ方向にヘラケズリする。瓦当面右端に笵割れを生ずる以前のものと、それ以後のものがあるが、ともに明確な稜をもつ曲線顎Ⅱの形態をとる例があり、顎形態の変化と笵傷進行の関わりについては明らかでない。青灰～暗灰色の硬質のものと、軟質で灰白～灰黒色を呈するものとがある。

出土量の多い6775

新　種　新種の軒平瓦が2（2）点、東面回廊地区から出土している。ともに中心飾りが不明なため、型式を確定することができない。**新種Ⅰ**は、左半部の破片で、内区文様はおそらく4回反転の均整唐草文であろう。外区には珠文をめぐらす。顎面から平瓦部にかけての屈曲が弱い曲線顎Ⅱ。凸面はタテ方向の調整が施されるが、摩滅のため不明瞭である。凹凸両面ともに、瓦当近くの一部にヨコナデ調整を加える。淡灰黒色を示し、軟質である。**新種Ⅱ**は、中心飾りの一部とその左側の唐草文の下部がわずかに残る。3回反転以上の均整唐草文で、外区は珠文とする曲線顎Ⅱであるが、新種Ⅰと同じく、顎面から平瓦部にかけての屈曲が弱い。顎部付近はヨコナデ調整。やや軟質で、淡灰黒色を呈する。

C　道具瓦・塼（PL.43～44）

鬼　瓦　あわせて8（6）点あり、Ⅰ～Ⅲの3型式に分けることができる。いずれも西隆寺独特のものと考えられる。4（3）点は小片のため型式不明。**鬼瓦Ⅰ**（PL.43-1）は、左上部の破片が金堂地区から1（0）点出土している。曲率からみて、比較的小型の鬼瓦であろう。界線の外側に小型の珠文をめぐらし、外縁は低い直立縁である。主文の復元は難しいが、文様構成からは鬼面文でないと思われる。裏面は不定方向、側面はカーブに沿ったヘラケズリを施す。硬質で青灰色を呈する。**鬼瓦Ⅱ**（PL.43-2）は、小型の鬼面文鬼瓦である。東面回廊地区と北面回廊地区から1点ずつ、計2（2）点が出土。別個体である。2本の界線で区画した外区に

（1）『西隆寺報告』では、6761型式と混同している。

珠文をめぐらし、明瞭な外縁をもたない。管見によるかぎり同笵例はないが、南都七大寺式の範疇に含めてよいと思われる。裏面に上方から斜め下に向ってまるい穴があけられている。棟端に固定するための仕口であろう。摩滅のため調整手法は不明。軟質で灰白色を呈する。**鬼瓦Ⅲ**（PL.43-3）は、比較的大型の鬼面文鬼瓦である。食堂地区から1(1)点が出土している。左半部の破片。眉と目が高くつり上がり、鼻は欠失するが、上顎の歯の一部が見える。外縁は低く、広い平坦面をもつ。裏面はヨコ方向主体、側面はカーブに沿ったヘラケズリを施す。灰～灰褐色を示し、比較的硬質である。

軒平瓦を焼成後に転用

隅木蓋瓦　軒平瓦6739Aを転用したものが1(0)点、東門地区の井戸SE010埋土中より出土している（PL.43-4）。焼成後に狭端側を大きくV字形に打ち欠く。凸面を上にして使用したものと考えられるが、打ち欠きを除いてとくに仕口は認められず、隅木への固定方法は不明。硬質で暗灰色を呈する。

面戸瓦　通常の蟹面戸1(1)点（PL.43-5）と、特殊な作りの面戸瓦と考えられるもの1(1)点（PL.43-6）がある。ともに食堂地区からの出土。前者は、丸瓦の胴部を利用して成形しており、ヘラで輪郭を切り取ったのち、裏面を大きく面取りする。ヘラケズリの及ばない部分には、丸瓦成形時の糸切痕が残る。硬質で青灰色を呈する。後者は、丸瓦の玉縁とそれに続く胴部の一部を利用したものである。玉縁から2㎝ほど下の部分に、凸面側から途中まで截線を入れて、焼成前に分割している。分割面は凸面側にヘラの截面、凹面側に破断面が残る。全体の形状から、玉縁を下にして用いた面戸瓦と推定しておきたい。軟質で灰黒色を示す。

塼　あわせて43(28)点が出土している。中門・南大門地区の8点、東面回廊地区の8点、食堂地区の12点が目を引くが、中でも中門・南大門地区は調査面積に比べて出土量が多い。全長を知りうる資料はなく、幅の判明するものが3点存在するにすぎない。それぞれの幅と高さは、16.6×8.1、15.0×8.3、14.3×8.0㎝である。おそらく全長が幅の2倍ほどの直方体となるものと思われる。厚さは、8㎝前後の厚手のものと、6㎝内外の比較的薄手のものに大きく二分することができる。厚さのわかる資料のうち、17点が前者、9点が後者である。粘土の剝離状況からみて、いずれも箱状の型枠に粘土を詰め込むことにより成形したものと推定される。表面にはヘラケズリないしナデ調整が認められる。灰～青灰色の硬質のものもあるが、概して軟質で灰白～灰黒色を呈する（PL.43-7）。

二種類の製作法

熨斗瓦　平瓦を焼成後に二つに打ち割ったもの（Ⅰ類）と、当初から熨斗瓦としての使用を意図したもの（Ⅱ類）に分けることができる。**Ⅰ類**（PL.44-1～3）は、破片では平瓦との判別が難しく、正確な実数をつかみがたい。そこで、東面回廊地区の井戸SE448の壁に使用されていたものを、代表としてあげることにする。ここでは熨斗瓦10点と平瓦3点が使用されていたが、熨斗瓦は全てⅠ類に属する[(1)]。全長33～37㎝、幅は中央部で14㎝内外である。いずれも凸面にタテ方向の縄叩きを施し、その後の調整は行っていない。叩き締めに際して、離れ砂の使用が認められる例がある。凹面は、両端と両側縁の内側を薄くヘラケズリする。灰～青灰色の硬質なものと、軟質で灰白～灰黒色を示すものとがある。**Ⅱ類**（PL.44-4～6）は、41(9)点が出土している。中門・南大門地区への集中が著しい。全て焼成前の平瓦の中央に、凹面側

(1)　井戸の曲率にあわせて平瓦を分割した可能性も想定されるが、相互に接合する例が皆無であることから、本来熨斗瓦として用いられたものと考えてよいであろう。

からタテ方向の浅い截線を入れて、焼成後に分割したもの。全長を知りうる資料はないが、側縁から截線までの幅は、ほとんどが12～14cmの範囲に収まる。截線の深さは３～10mm程度で、５mm前後のものが多い。この部分は平滑な面をなすが、これに続く凸面側は、分割の際の破断面となる。分割が截線の位置で行われず、横にずれた例も多い。凸面は、やはりタテ方向の縄叩きの後、調整を加えていない。凹面も無調整のものが主体だが、端面の内側を薄くヘラケズリする例もみられる。青灰～暗灰色の硬質なものと、軟質で灰黒色を示すものとがある。

D　丸瓦・平瓦（PL.45～46）

丸瓦は破片数にして23,777(16,583)点、3,994.0(1,296.9)kg、平瓦は同じく104,207(79,044)点、13,283.5(9,240.6)kgにおよぶ大量の資料が出土している。地区別の内訳は、Tab. 2 に示すとおりである。整理が充分に進んでいないため、ここでは完形品ないしそれに近いものを中心として、主な特徴を述べるにとどめる。

丸　瓦　全長36cm前後の比較的短いものと、39cm内外の長いものとがある（平均38.0cm）。全て玉縁式で、玉縁長５～6.5cm、胴部中央幅は15～16cmの範囲に収まるものが多い。胴部長の平均は32.2cm。凸面はタテの縄叩きののち、胴部にタテ方向のナデ、玉縁部から肩部にかけてヨコ方向のナデ調整を加えるのを基本とする。凹面は、広端と胴部両側縁の内側を面取りするものが多く、玉縁の端部と両側縁の内側にも面取りを施す例がある。ほとんどが粘土板を使用しているが、ごく一部に粘土紐を用いた資料も認められる（PL.45-５）。また、玉縁部の凸面に２条の凸線をもつ資料が、東門地区と東面回廊地区からそれぞれ１点ずつ出土している（PL.45-６～７）。暗灰色の硬質なものと、軟質で灰黒～灰白色を呈するものとがある。　**玉縁の凸線**

平　瓦　全長32～34cm（平均33.2cm）、広端幅25～27cm、狭端幅22～24cmの範囲に含まれるものが多い。凸面はタテ方向の縄叩きを施し、その後の調整を加えていない。凹面は、無調整のものと、四辺の内側を薄くヘラケズリするものとがある。観察の対象としたものは、全て粘土板を用いた一枚作りによっており、凹面が平滑で糸切痕が残る。また凸型成形台の上においた布の端が表れている例がある。なお、焼成前の平瓦の広端部中央にV字形の切り欠きを入れ

Tab. 2　丸瓦・平瓦の地区別出土量

	丸瓦		平瓦	
	点数	重量	点数	重量
中門・南大門地区	5,996	1,205.1kg	17,990	2,918.9kg
金堂地区	100	18.6kg	567	68.2kg
東面回廊地区	8,336	1,028.0kg	42,901	4,199.8kg
北面回廊地区	786	112.8kg	4,969	557.3kg
塔地区	155	21.1kg	594	52.9kg
東門地区	1,099	235.9kg	3,201	699.3kg
食堂地区	4,929	716.3kg	19,790	2,604.4kg
北辺築地地区	2,399	575.9kg	11,039	1,838.1kg
西南地区	133	15.7kg	345	41.0kg
西北地区	481	64.6kg	2,811	303.6kg
計	23,777	3,994.0kg	104,207	13,283.5kg

たものが1点、北辺築地地区から出土している（PL.46-5）。全長38.5㎝、広端幅28.8㎝の大型品。この他、隅棟に接する部分に用いた隅平瓦が東門地区から1点出土しており（PL.46-6）、凸面が縄叩きではなく格子叩きであるものも少数ながら認められる（PL.46-7）。青灰色の硬質なものと、軟質で灰～灰黒色を示すものとがある。

隅平瓦

E 文字瓦（PL.47, Fig.39）

刻印を押捺したものが28(2)点、ヘラ書きによるものが2(0)点出土している。すべて奈良時代に属する。刻印の種類には「大」「雇(?)⊥」「⊥」「⊤」「理」「上」「李」「住(?)」「＋」があり、ヘラ書きはともに「＋」である。

「大」（1・2） a・bの2種類があり、合計10点が出土。ともに逆字で、文字だけの陽刻である[1]。こうした逆字の「大」の刻印をもつ瓦は、西大寺からも出土している[2]が、同一の刻印はない。「大(a)」（1）は、中門・南大門地区から2点、東門地区から2点の、計4点が出土。平瓦凹面の中央部上端近くに押捺されている[3]。広端を上にしたものと推定される。軟質で灰白～灰黒色を示す。「大(b)」（2）は、東門地区から3点、金堂地区から2点、東面回廊地区から1点の、計6点が出土した。平瓦凹面の中央部、広端を上にした状態で上端近くに押捺する。淡灰色の比較的硬質のものもあるが、概して軟質で灰黒～灰白色を呈する。

「雇(?)⊥」（3） 東門地区から3点、中門・南大門地区から1点の、計4点が出土している。逆字で、文字だけの陽刻である。平瓦凹面のほぼ中央、広端を上にした状態で上端近くに押捺する。うち1点は、熨斗瓦としての利用を意図して、タテの截線を入れたもの。灰黒～灰白色を示す軟質なものが多い。

「⊥」（4） 東門地区から一点出土した。文字だけの陽刻。平瓦凹面のほぼ中央、広端を上にした状態で上端近くに押捺されている。「雇(?)⊥」の一部である可能性もあるが、前者とは刻印が異なる。比較的硬質で灰黒～灰白色を示す。

「⊤」（5） 中門・南大門地区から1点出土。文字だけの陽刻である。平瓦凹面の向って左上隅に押捺されている。「⊥」の可能性もあるが、その場合は右下隅の押捺ということになる。他の刻印瓦が、いずれも端面を上にした状態で正位となるように、その上端近くに押捺されていることから見て、「⊤」と判断しておく。狭端・広端のどちらを上にしたのかは不明。軟質で灰黒色を呈する。

平城宮とまったく同一の刻印

「理」（6～9） あわせて4種類、5点が出土している。いずれも平城宮にまったく同一の刻印を使用した例があり、分類はそれにしたがう[4]。全て正字で、正方形に近い刻印の輪郭があらわれている。「理(g)」（6）は、中門・南大門地区と金堂地区からそれぞれ1点ずつ出土。平瓦の狭端を上にした状態で、凹面の右上隅に近い位置に押捺する。青灰色の硬質なものと、灰白色のやや軟質なものとがある。「理(i)」（7）は、金堂地区から1点出土している。平瓦の凹面に押捺されているが、位置は不明。やや軟質で灰白色を示す。「理(j)」（8）は、金堂地区から1点出土。平瓦の狭端を上にした状態で、凹面の右上隅に押捺する。比較的硬質で淡灰色

（1） 文字の正逆と陽刻・陰刻は、瓦の面における状態でいうものとする。
（2） 西大寺『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』1990年。
（3） 以下、押捺位置については、文字を正位とした状態でいう。
（4） 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅴ 瓦編5』1977年。

を呈する。「理(k)」(9)は、中門・南大門地区から1点出土している。やはり平瓦の狭端を上にして、右上隅に近い部分に押捺する。灰黒〜灰白色を示し、軟質である。

「上」(10)　金堂地区から2点、食堂地区から1点の、計3点が出土している。正字で、文字だけの陽刻。平瓦の左上隅に近い部分に押捺されているが、狭端・広端のどちらを上にしたのかは明らかでない。やや軟質で灰白〜灰黒色を呈する。

「李」(11)　中門・南大門地区から2点が出土している。逆字で、文字だけの陽刻である。平瓦の広端を上にした状態で、凹面の上部中央やや左寄りの部分に押捺する。やや軟質で灰黒〜灰白色を呈する。

「住(?)」(12)　中門・南大門地区から1点出土している。逆字で、文字だけの陽刻。平瓦の凹面に押捺するが、位置は明らかでない。軟質で灰白〜灰黒色を呈する。

「+」(13〜15)　刻印の「+」(13)が中門・南大門地区から、ヘラ書きの「+」(14)は東門地区、「+」(15)は金堂地区から、それぞれ1点ずつ出土した。刻印は文字だけの陽刻。平瓦凹面の端面近くに押捺するが、狭端・広端の区別は明らかでない。軟質で灰黒〜灰褐色を呈する。ヘラ書きの2点も、書かれた位置は平瓦凹面の端面近くである。ともに横画を先、縦画を後としている。刻線の状況からみて、刻印瓦と異なり、端面を下にした状態で書かれたものと推定される。軟質で灰黒〜灰白色を示す。

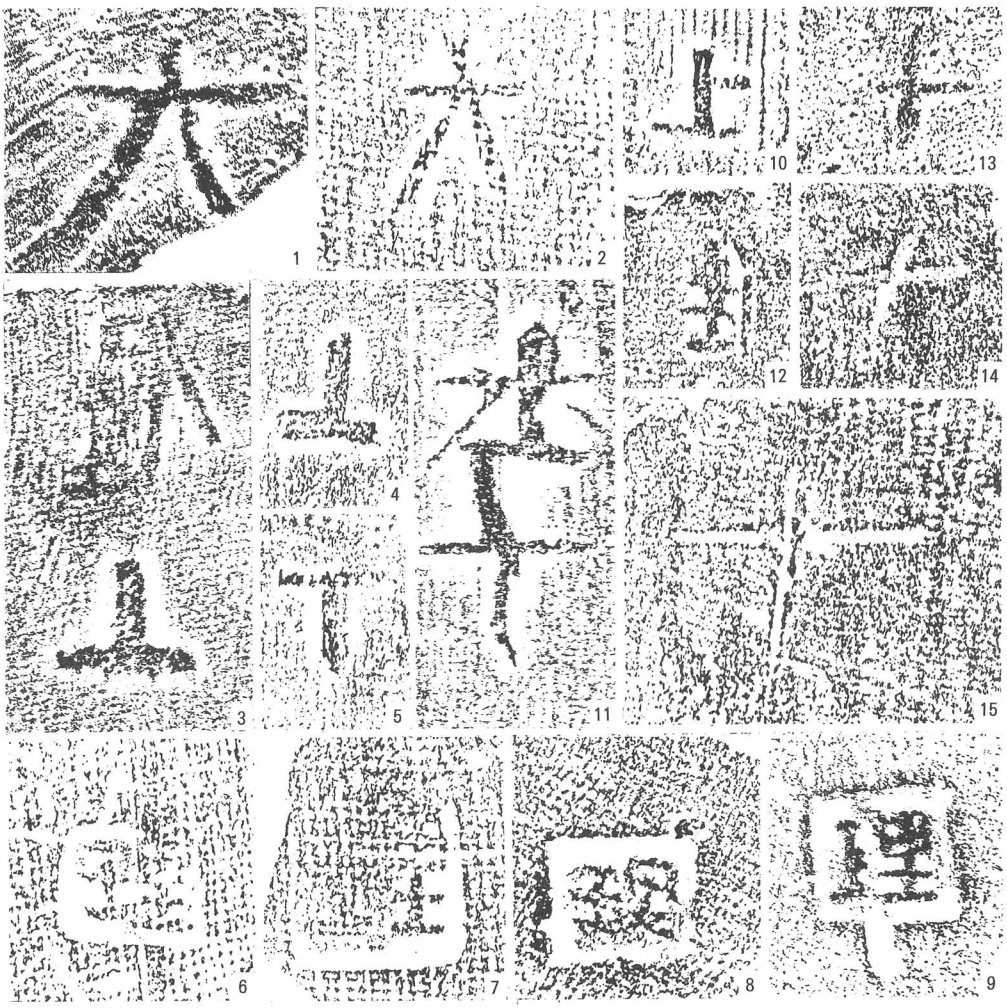

Fig. 39　文字瓦拓影　1：1

2　土　　器

西隆寺の８次にわたる調査では、整理箱で400箱に達する土器が出土した。量的に多数を占めるのは奈良・平安時代の土師器、須恵器であるが、他に二彩・三彩・緑釉・灰釉の施釉陶器、黒色土器、製塩土器、硯・土馬などの特殊土製品、唐の白磁、および平城京造営以前の縄文土器、古墳時代の土師器・須恵器がある。土器は、土壙・井戸などの遺構や整地土、包含層から出土したが、ここでは西隆寺関係の遺構、および整地土、包含層出土の土器を中心に述べ、その後に平城京造営以前の土器について記すこととする。

土器の記述に当たっては、器種名・調整手法・年代などについては、基本的に既刊の『平城宮報告』に従う[(1)]。記述の煩雑を避けるため、最初に土器の調整手法について記しておく。土師器の食器類は削りの有無および部位によって、ａ・ｂ・ｃ・ｅ手法に分けている。ａ手法は口縁部をよこなでし、底部外面は不調整のもの、ｂ手法は口縁部をよこなでし、底部外面を削るもの、ｃ手法は削りが口縁部まで及ぶもの、ｅ手法は口縁部直下を幅狭くよこなでし、以下が不調整のものである。なお、ｃ手法の中にはｅ手法を削るものも存在し、ｅ-ｃ手法として区別しておく。また、へら磨きの有無によって０～３手法を分けている。０手法はへら磨きを行なわないもの、１手法は口縁部外面、２手法は底部外面、３手法は口縁部と底部の全面をへら磨きするものを示す。このａ～ｃ・ｅ手法と０～３手法の組み合せによって、a_1手法などと調整手法を表現する。

調整手法

また、色調、胎土の差によって、土師器を２群、須恵器を６群に分けている。土師器Ⅰ群土器は灰褐色を呈し、砂を殆ど含まない精良な胎土、Ⅱ群土器は灰褐～暗褐色を呈し、微小な砂を含む胎土で、京内の遺跡からはⅠ群土器は殆ど出土しないという特徴がある。須恵器の群別の詳細はここでは省略するが、それぞれ陶邑、生駒、播磨、猿投、美濃などの産地の差を反映したものである。

年代は奈良時代の土器を平城宮土器Ⅰ～Ⅴに、平安時代初頭、平城上皇還都の時期の土器を平城宮土器Ⅶと区分しているが、編年の詳細、および実年代については『平城宮報告』ⅩⅢ・ⅩⅣに最近の調査成果を踏まえて記してあるので、そちらも合わせて参照されたい。

図示にあたっては、実測図は1／4、写真は2／5の縮尺を基本とし、適宜他の縮尺も用いた。実測図に付した番号は写真図版でも共通している。１～199は土師器、201～299は黒色土器・製塩土器・縄文土器・埴輪、301～499は須恵器、500番台は施釉陶器・白磁、600番台は特殊土製品とした。

A　土壙出土の土器（PL. 48）

今回の西隆寺の調査では、土器がまとまって出土した土壙は多くない。これは、回廊や食堂院などの伽藍中枢部を対象としたことによると思われるが、その中で、東面回廊の周辺に西隆寺関係の土器および西隆寺以前の右京一条二坊九坪の宅地の時期の土器を出土する土壙が点在していた。

(1)　奈良国立文化財研究所『平城宮発掘報告Ⅶ』1976、『平城宮発掘報告ⅩⅢ』1991

1）SK388出土土器（1～13・301～312）

ＳＫ338からは、奈良時代末の土器がまとまって出土した。土師器杯Ａ・Ｂ、皿Ｃ、椀Ｄ、甕、須恵器杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ、鉢Ａ、平瓶、壺Ｌがある。

奈良時代末の土器

土師器　杯Ａ（11）　杯ＡⅡが１点出土した。a_0手法で調整し、暗文はない。

杯Ｂ（12）　口径16.2cmの杯ＢⅢ。内面と口縁部外面をよこなでし、底部外面を粗くなでる。口縁端部はやや外反する。口縁部内面に炭化物が付着し、灯火器として使用している。

皿Ｃ（1～10）　口縁部外面を幅狭くよこなでし、底部外面を不調整のｅ手法で調整する。口縁部のなでは強く、外反気味となる。底部を平坦に仕上げる平底系のもの10点と、丸く仕上げる丸底系のものが５点ある。平底系のものは砂粒を若干含む胎土で、暗赤褐色を呈する。丸底系のものは精良な胎土で、淡黄灰色を呈する。平底系７個体と丸底系４個体の口縁部内面に炭化物が付着し、灯火器として使用したことがわかる。

椀Ｄ（13）　口径17.8cm、高さ3.4cm。b_0手法で調整する。口縁部内面に炭化物が付着する。皿Ｃの平底系のものと胎土が酷似する。

須恵器　杯Ａ（301）　口径15.2cmの杯ＡⅢ。底部外面はヘラ切り不調整。

杯Ｂ（308）　口径14.0cmの杯ＢⅢ。内面は磨滅して平滑となり、赤色顔料が付着する。朱の硯として使用したものであろう。

杯Ｂ蓋（305～307）　いずれも口縁部が笠形のＢ形態となる杯ＢⅢ蓋。305・306は、ゆるく屈曲する口縁部をロクロなでで調整する。307は口縁端部を除く頂部外面をロクロ削りで調整する。ロクロは反時計回り。胎土に硬い長石粒を多く含む。

杯Ｃ（303・304）　土師器杯Ａをまねた器形で、口縁端部が肥厚する。内外面をロクロなでで調整するが、底部外面はヘラ切り不調整。

皿Ａ（302）　口径20.6cm、高さ3.5cm。口縁部はやや外反し、内外面をロクロなでで調整する。底部はヘラ切り不調整。

鉢Ａ（309・310）　309は口径22.0cm。外面に密な磨きがある。Ⅱ群土器。310は口径24.4cm。焼成は不良で、表面の磨滅が著しく、調整手法は明確ではない。口縁端部は丸くおさめ、309の垂直に切りおとしたような形態とは異なる。

壺Ｌ（312）　高台を付けない器形で、口縁端部を欠失。口頸部と胴部上半をロクロなで、胴部下半はロクロ削りで調整し、底部は不調整。肩部と頸部に灰がかかるが、釉化していない。

平瓶（311）　大型の平瓶の口頸部。石英粒を含む胎土で、口縁端部に灰がかかる。

2）SK371出土土器（14～21）

東面回廊ＳＣ300横の土壙ＳＫ371からは、土師器椀Ａが10個体まとまって出土した。このうちの８個体がほぼ完形に復元できる。これらは、口径12.6cm～13.2cm、高さ3.8cm～4.1cmとほぼ同大で、調整もほぼ同じである。精良な胎土を用い、焼成も堅緻で赤褐色を呈する。c_1手法で調整し、底部外面の削りは特に強いために底がやや上げ底気味となる。外面の磨きは粗い。完形の８個体のうち、３個体の口縁部内面に炭化物が付着し、灯芯を安定させるために口縁部の一部を打ち欠いたもの（16・18）も見られる。出土状況は、直径約20cmの小穴から重なるように出土しており、祭祀的な用途が推定される。

3）**SK455出土土器**（313～317）

西隆寺造営時の土器

ＳＫ455からは、須恵器壺Ｋ・Ｌ、横瓶が出土した。全ての個体の内面と、一部の断面に漆が付着する。これらは、漆を運搬する容器として使用した後、一括して廃棄されたものと思われる[1]。漆が付着した須恵器片は、回廊の礎石据え付け掘形内からも出土しており、西隆寺造営に伴なう漆工房が近くにあり、回廊建立直前に操業を終えたと考えられる。

壺Ｋ（313•314）　肩の張る体部に細い頸部がつく器形で、２個体ある。いずれも口頸部から肩部の破片で、完形に復せるものはない。

壺Ｌ（315）　高台の残る破片が１点、肩部の破片が２点、頸部の破片が２点の計５個体ある。精選された胎土で、灰白色に焼き上がり、自然釉の見られる個体と、砂粒を多く含む胎土で、暗灰色に焼き上がる個体の２種がある。

横瓶（316・317）　２点あるが、口縁部の形状や成形、調整手法が異なる。316はやや小型の横瓶。体部の一部には縄叩きの跡が残り、一部にはカキ目調整も見られる。最終的に全体をなでて調整する。内面もなでで調整するが、成形時の凹凸が残る。317は外面に平行叩き目、内面に同心円当て具の痕跡を残す。外面は、叩きの後になで調整を行なうが、部分的で、平行叩き目が良く残る。

4）**SK361出土土器**（22・318・319）・**SK406出土土器**（23・320～323）

西隆寺造営以前の土器

いずれも平城宮土器Ⅲに属し、西隆寺造営以前のものであるため、ここでは一括して報告する。土師器杯Ａ、須恵器杯Ａ・Ｂが出土した。

土師器　杯Ａ（22・23）　22は口径16.0㎝、高さ3.3㎝の杯ＡⅣ。a_0手法で調整し、内面に放射暗文がある。底部外面には「十」の線刻がある。23は口径20.6㎝の杯ＡⅡ。b_0手法で調整し、内面に放射暗文がかすかに残る。

須恵器　杯Ａ（318）　口径17.6㎝、高さ3.6㎝。口縁部の内外面をロクロなでし、底部外面はヘラ切り不調整のままである。

杯Ｂ（319～323）　杯ＢⅡ（322•323）と杯ＢⅢ（319～321）がある。

Ｂ　柱穴出土土器（fig.40）

1）**回廊SC300・450出土土器**（24・25・324～326）　回廊の礎石抜取り穴からは、瓦を含むかなりの量の遺物が出土したが、土器は少ない。東面回廊ＳＣ300からは、須恵器杯Ｂ（325）と杯Ｂ蓋（324）、壺Ｍ（326）が各１点。北面回廊のＳＣ450からは、土師器ⅢＡ（25・26）２点が出土した。

土師器　ⅢＡⅠ（24・25）　24が口径16.2㎝、高さ2.1㎝。25が口径17.8㎝、高さ2.1㎝。いずれもｅ手法で調整する。24の口縁端部には炭化物が付着する。

須恵器　杯Ｂ（325）と杯Ｂ蓋（324）はいずれもⅡ群土器。326は壺Ｍ。内外面とも暗灰色を呈し、肩部に自然釉がかかる。猿投窯の製品か。

土師器ⅢＡは、平城宮玉手門付近の土壙ＳＫ1623出土土器[2]と類似し、９世紀後半の年代が与

(1) 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
(2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅻ』1985

えられる。回廊の廃絶時期を示す遺物であろう。須恵器杯Ｂと杯Ｂ蓋は奈良時代前半に属する。東面回廊の西側では、奈良時代前半の井戸や掘立柱建物を検出しており、回廊廃絶後に周辺の遺物が混入したものだろう。

2）SB541出土土器（26）　口径19.2cm、高さ3.9cmの土師器杯Ａ。ｂ。手法で調整するⅡ群土器で、口縁部外面はなでによる凹凸を残す。暗文はない。平城宮土器Ⅲ～Ⅳ。北側柱の東から６本目の柱穴の柱抜取穴から出土した。

3）SB395出土土器（327・328）　須恵器杯Ｂが２点が出土した。327は北妻柱掘形出土。口径12.0cm、高さ4.7cm。328は東北隅柱掘形出土。口径12.5cm、高さ4.3cm。平城宮土器Ⅲ～Ⅳか。

4）SA535出土土器（329）　須恵器壺Ｌで、高さ13.9cm、径13.4cm。頸部中位から上を欠失する。胴部下半はロクロ削りで調整する。底部外面に「×」の焼成前の線刻がある。東から２番目の柱掘形から出土。

Ｃ　ＳＧ530および整地土，包含層出土土器（PL. 49～51）

西隆寺の東北部、第228次調査区の西端から第223-21次調査区にかけては、池状のくぼみＳＧ530が広がっている。これは、古墳時代の溝ＳＤ529を平城京造営以後もそのまま残して池としたもので、西隆寺の造営に伴って埋められる。ＳＧ530の埋土、およびそれを埋めた整地土と包含層、および包含層に掘りこんだ土壙ＳＫ538からは大量の土器が出土し、この地域の変遷と利用形態を物語る格好の資料である。ここでは、ＳＧ530埋土・整地土・包含層の順に奈良時代以降の土器について記述し、ＳＤ529出土の古墳時代の土器については後述する。なお、仏具として使用した須恵器・施釉陶器については施釉陶器の項に記載した。

1）SG530出土土器　ＳＧ530の埋土は大きく３層に分かれ、上・中層から奈良時代の土器が出土した。

土師器（27～36・75・79・83・84）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、ⅢＡ・Ｂ・Ｃ、椀Ａ・Ｃ、

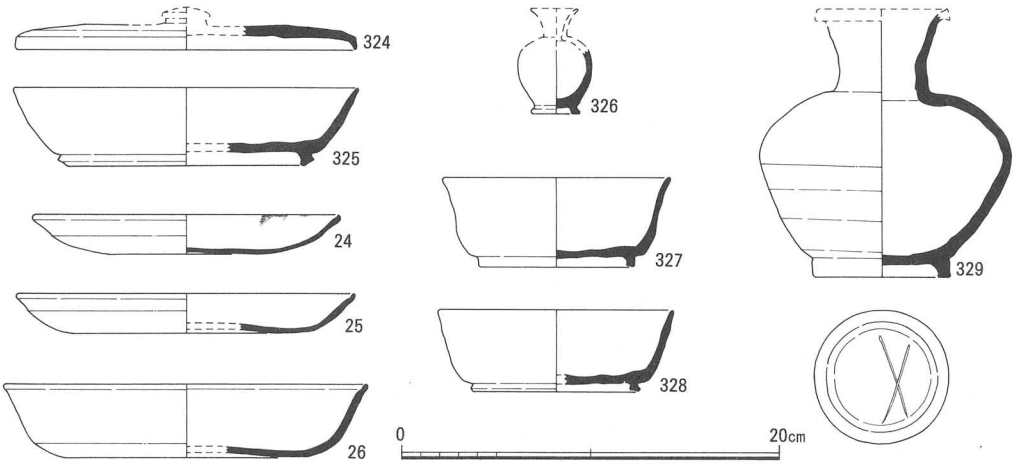

Fig. 40　柱穴出土の土器

ＳＧ530の主体は平城宮土器Ⅲ・Ⅳ

高杯、鉢の食器、壺Ａ・Ｂの貯蔵器、甕の煮沸器がある。平城宮土器Ⅰ・Ⅱ・Ⅴを一部含むが、主体は平城宮土器Ⅲ・Ⅳである。

杯Ａ（29）　b_0手法で調整する。暗文はない。

杯Ｂ（34）　器高の高い器形の杯ＢⅠ-1。風化が著しいが、外面に磨きが残る。磨きを施す蓋（33）が伴う。

杯Ｃ（30）　b_0手法で調整し、口縁端部は内傾する。

椀Ａ（27）　c_0手法で調整する椀ＡⅡ。底部に墨痕があるが、判読できない。

Ⅲ Ａ（31・32）　31はⅠ群土器で、b_0手法で調整する。32はc_0手法で調整するⅡ群土器。

Ⅲ Ｂ（35）　口径28.8cm。口縁部外面をよこなでし、口縁端部は外反する。

Ⅲ Ｃ（28）　口縁部に炭化物が付着し、灯火器として使用している。

高杯（36）　脚部の破片。裾部に磨きがある。平城宮土器Ⅴに属し、上層の土器が混入したものか。

壺Ａ（75）　球形の体部に短い口縁部を付す薬壺形の器形で、口径19.4cm、高さ23.2cm。口縁部と胴部外面を密に磨き、内面には細かい刷毛目がある。把手は１箇所のみ残存するが、２箇所に付くものと思われる。平城宮土器Ⅰに属する。

鉢（79）　口縁部の小破片で、口縁部の一部を外方に押し出して片口を付ける。内外面は刷毛目で調整する。丸底の器形になると思われる。平城宮土器Ⅰ～Ⅱ。

甕（83・84）　内面をよこなで、胴部外面を刷毛目で調整する。84は風化が著しいが、口縁部内面にも刷毛目がある。

須恵器（330～345）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｘ、椀Ｂ、Ⅲ Ａ・Ｃ、鉢Ａ、平瓶、壺Ａ、壺Ａ蓋、壺Ｅ・Ｋ・Ｌ・Ｍ、甕がある。土師器に比べて、出土量は少ない。

杯Ａ（330・331）　330はⅠ群土器の杯ＡⅢ。331は口縁端部がやや外反し、底部外面は不調整。平城宮土器Ⅰ～Ⅱ。

杯Ｂ（339・340）　340は口径18.6cmの杯ＢⅠ。339は口径14.0cmの杯ＢⅢ。

杯Ｂ蓋（335～338）　口縁端部が屈曲するもの（335・336・338）としないもの（337）がある。337は頂部外面をロクロ削りし、自然釉が降着する。338は内面を硯として使用している。

杯Ｘ（341・342）　杯Ｃに高台を付した器形で、口縁端部に巻き込みがある。出土例は極めて少ないが、長屋王邸北の二条大路上の溝ＳＤ5100に類例がある[1]。341には針で施したような鋭い線刻がある。

椀Ｂ（334）　残存高9.1cmで、口縁端部を欠失する。胴部下半と底部外面はロクロ削りで調整し、低い高台を付ける。

Ⅲ Ｃ（333）　口縁端部が平坦な面をなし、底部は丸みを帯びる。平城宮土器Ⅱ。

壺Ａ（344）　球形の体部に短い口縁部を付す器形。胴部下半をロクロ削りする。

壺Ａ蓋（343）　口縁端部は丸みを帯びる器形で、つまみを欠失する。内外面に自然釉が降着する。

壺Ｍ（345）　球形の体部に細い口縁部を付す小型の壺で、口縁端部を欠失する。

---

(1) 奈良国立文化財研究所『平城京長屋王邸と木簡』1991、出土土器の詳細については、現在正式報告書を準備中。

2）整地土出土土器　ＳＧ530の上には、西隆寺の造営に伴うと考えられる整地土があり、そこから若干の土器が出土した。平城宮土器Ⅳ・Ⅴにわたる。

ＳＧ530の上の整地土から平城宮土器Ⅳ・Ⅴが出土

土師器（37～45）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｃ、ⅢＡ、椀Ａ・Ｃ、甕がある。

杯Ａ（37）　口径18.2cmの杯ＡⅠ。c_1手法で調整する。

杯Ｂ（44・45）　44は内外面をよこなでし、口縁部外面には粗い磨きがある杯ＢⅡ。45は杯ＢⅠ-1で、風化が著しいが、c_1手法で調整していると思われる。

杯Ｂ蓋（43）　風化が著しいが、外面に磨きがある。

椀Ａ（41・42）　41は椀ＡⅢ、42は椀ＡⅡ。ｃ手法で調整し、磨きの有無は不明。

ⅢＡ（38～40）　40はa_0手法で調整するⅢＡⅠ。口縁端部に巻き込みがある。38・39はⅢＡⅡで、38はc_0手法、39はb_0手法で調整する。

須恵器（346～359）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、ⅢＡ・Ｃ、平瓶、壺Ｌ・Ｍ、甕がある。

杯Ａ（354）　口径10.0cmの杯ＡⅣ。

杯Ｂ（349～353）　杯ＢⅢ（349～351）・ＢⅤ（352・353）がある。内外面をロクロなでで調整するが、350は底部外面をロクロ削りする。

杯Ｂ蓋（346・347）　346は頂部外面がヘラ切り不調整、346は全面をロクロなでで調整する。

平瓶（355）　偏平な体部で、把手は付さない。口頸部を欠失する。胴部外面はロクロ削りを行ない、底部は不調整。外面に自然釉が降着する。

壺（356・357）　356は壺Ｌで、口頸部の接合は二段接合。肩部以下をロクロ削りする。357は壺Ａまたは壺Ｑの底部で、内外面ともにロクロなでで調整する。他に、漆の付着した壺Ｌの口頸部がある。

壺蓋（348）　壺Ｌなどの長頸壺の蓋と思われる。全面をロクロなでで調整する。

甕Ａ（358）　口縁部から体部上半の破片。外面に平行叩き、内面に当て具の痕跡が残る。

甕Ｃ（359）　外反する短い口縁部を付す広口の甕。外面に平行叩き、内面に同心円状の当て具の痕跡が残る。底部外周をロクロ削りする。

黒色土器（202・203）　椀、鉢Ｘがある。包含層出土のものを含めて、全て黒色土器Ａ類。

椀（203）　c_1手法で調整し、内面には密な磨きを施す。

鉢Ｘ（202）　風化のために調整の詳細は不明であるが、口縁部付近をよこなでし、内面には縦方向の磨きがある。胎土には砂粒を多く含み、焼成も不良。

製塩土器（207～209）　砲弾形の器形になると思われ、外面は不調整、内面は不定方向のなでで調整する。胎土には砂粒を大量に含む。

3）包含層出土土器　西隆寺造営後、この地域はＳＢ522およびそれを建て替えたＳＢ521とＳＡ539にはさまれた空閑地であり、塵芥処理用の一角として利用されたらしく、包含層からは大量の土器が出土した。年代的には平城宮土器Ⅴ～Ⅶにわたるが、主体を占めるのは平城宮土器Ⅴで、図示したものはほとんどがこれにあたる。

土師器（46～69・76～78・80～82・85～88）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、杯Ｅ、ⅢＡ・Ｂ・Ｃ、椀Ａ・Ｃ、高杯、盤、壺Ｂ、甕がある。

杯Ａ（46～51）　50・51は杯ＡⅠ。c_1手法で調整するが、51は風化のため、外面の磨きは

不明瞭。46～49は杯ＡⅡ。49はａ$_0$手法、46～48はｂ$_0$手法で調整する。ただし、46・47は削りの範囲が口縁部中程まで達し、長岡宮土器によく見られる、ｃ手法の削りが口縁上端まで及ばないｃ´手法と呼ぶものに近い。

杯Ｅ（52・53）　外面全体を粗く磨く、ｃ$_3$手法で調整する。胎土に微小な雲母を混入する。

皿Ａ（54～59）　皿ＡⅠ（58・59）、皿ＡⅡ（54～57）がある。58はｂ$_0$手法で調整するⅠ群土器、それ以外はⅡ群土器で、55はａ$_0$手法、54・57はｂ$_0$手法、56・59はｃ$_0$手法で調整する。

皿Ｃ（63～66）　平底で浅い器形（63～65）と、丸底に近く深い器形（66）がある。灯火器として使用したもので、63・64・66には炭化物が付着する。

椀Ａ（60～62）　ｃ手法で調整するが、風化が著しく、磨きの有無ははっきりしない。62には底部外面に「#」の焼成後の線刻がある。

高杯（67）　脚部の破片。口縁部外面と裾部外面に磨きがある。

盤Ｂ（68・69）　盤ＢⅠ（69）と盤ＢⅡ（68）がある。両者ともに口縁部外面を縦方向に削り、その上に粗い磨きを施すｃ$_1$手法で調整する。

壺Ｂ（76～78）　内面はよこなで、外面は口縁部を幅狭くよこなでし、以下は不調整で残す。

甕（80～82・85～88）　口径により、甕ＡⅠ（85・86）、甕ＡⅡ（80～82）、甕ＡⅢ（87・88）に分かれる。外面を刷毛目、内面をよこなでで調整するのを基本とするが、80・81・86には内面にも刷毛目がある。88は内面と口縁部外面をよこなでするが、胴部外面は不調整。胴部の一部に磨き状の痕跡がある。

須恵器（360～385）　杯Ａ・Ｂ、杯Ｂ蓋、皿Ａ・Ｃ、鉢Ａ、壺Ｅ・Ｍ、甕がある。

杯Ａ（378・379）　378は口径12.4㎝の杯ＡⅣ。379は口径13.4㎝の杯ＡⅢで、底部外面はヘラ切り、口縁部外面下半はロクロ削りの後、ロクロなでで調整する。

杯Ｂ（367～377）　杯ＢⅡ（367～370）・ＢⅢ（371～375）・ＢⅣ（377）・ＢⅤ（376）がある。高台は底部外周に接して付くものが多い。

杯Ｂ蓋（360～366）　杯ＢⅡ～Ⅴ蓋があり、それぞれ杯ＢⅡ～Ⅴに伴う。ほとんどのものは、口縁端部が屈曲し、下方への突出も鈍い。365は、口縁端部が鋭く突出する、愛知県猿投窯の製品である。

皿Ａ（380・381）　380は口径16.6㎝、381は口径15.8㎝。380は底部外面をロクロ削りで調整する。

鉢Ａ（385）　Ⅱ群土器で、外面をロクロ削りする。内外面ともに、ロクロを利用したと思われる磨きを密接に施す。外面に重ね焼きの痕跡がある。

黒色土器（201・204～206）　杯Ａ、椀、鉢Ａがある。

杯Ａ（201）　須恵器杯Ａに近い器形。外面は口縁部付近をよこなでし、それ以下を削る。内面は風化が著しいが、密な磨きを施していると思われる。

椀（204）　整地土出土の203とほぼ同様のもので、ｃ$_1$手法で調整し、内面には密な磨きを施す。

鉢Ａ（205・206）　205はｃ$_3$手法で調整。内面は口縁部付近に磨きが残存するが、それ以下は風化のため不明。口縁部の１箇所に焼成後の穿孔がある。206はｃ$_3$手法と思われるが、風化のためにはっきりしない。内面には密な磨きがある。胎土に金雲母を混入する。

4）SK538出土土器（70～74）　ＳＫ538は包含層に掘り込んだ埋土に炭が混入する土壙で、少量の土師器が出土した。出土土器は、包含層の主体の土器よりはやや新しい特徴を示し、長岡京の時期のものと思われる。　長岡京の時期

杯Ａ（71）　口径17.8cmの杯ＡＩ。c_0手法で調整する。

椀Ａ（70）　口径14.2cmで、c_0手法で調整する。

皿Ａ（72・73）　72はc_0手法で調整する皿ＡⅡ。73はa_0手法で調整する皿ＡＩで、口縁端部に巻き込みがある。

皿Ｂ（74）　口径28.8cm。b_0手法で調整し、口縁端部は強く外反する。

Ｄ　井戸出土の土器（fig.41，PL.52）

1）SE370出土土器（90～92・387～389　）

ＳＥ370の埋土からは、土師器杯Ａ、皿Ｃ、甕、須恵器杯Ｂ、壺Ｌ・Ｑが出土した。　西隆寺造営直前の土器

土師器　杯Ａ（90）　b_0手法で調整し、暗文はない。

甕（91・92）　２点出土した。口縁部から内面にかけてなで調整、外面は縦方向の刷毛目調整を行なう。91は口径20.1cm、92は口径29.8cm。

須恵器　杯Ｂ（387）　Ｉ群土器で、口径10.8cm、高さ3.4cmの杯ＢＶ。

壺Ｌ（389）　高台部と肩部に陶片の融着がある。肩部には厚く自然釉がかかり、高台部へと流下する。

壺Ｑ（388）　胎土は砂粒を多く含む特徴的なもので、ＳＫ455から出土した壺Ｌに類似したものがある。肩部全面に降灰が見られるが、釉化はしていない。

SE548出土土器（89・386）

ＳＥ548は、北面回廊ＳＣ450の北、講堂推定地にある井戸。埋土からは、土師器皿Ａ、須恵器杯Ｂ蓋各１点と緑釉陶器（PL.55-515）が出土した。平城宮土器Ⅶに属する。　平城宮土器Ⅶ

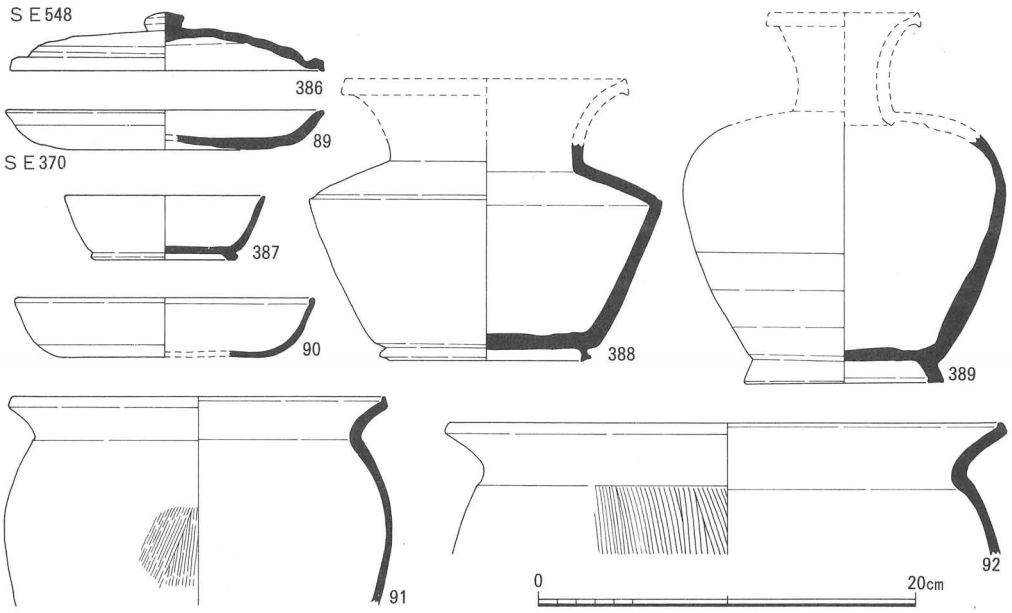

Fig.41　ＳＥ548・ＳＥ370出土の土器

土師器　皿A（89）　口径17.5cm、高さ2.1cm。e 手法で調整し、口縁直下を強くよこなでする。

須恵器　杯B蓋（386）　口径16.6cm、高さ3.2cm。口縁端部が強く屈曲し、灰褐色を呈する。

3）SE491出土土器（PL. 52）

10世紀後半の土器

ＳＥ491は伽藍東北部のＳＢ490とＳＢ495の間にある井戸。掘形には２時期あり、改修を行なっている。改修後には扉板を転用して井戸枠としており、枠内から10世紀後半の良好な一括の土器が出土した。

a）井戸掘形出土土器（93・390～392）　土師器甕A、須恵器杯B蓋、壺Lと灰釉陶器椀（PL. 55-521）が出土した。

土師器　甕A（93）　小型であるが器壁は比較的厚い。体部外面に細かい刷毛目がある。

須恵器　杯B蓋（390・391）　端部の屈曲しないA形態（390）と、端部の強く屈曲するB形態（391）各１点がある。390は奈良時代後半、391は平安時代初頭の年代が考えられ、井戸の改修の年代差を示すものであろう。

壺L（392）　口縁部の破片。口縁端部の作りが非常に鋭く、焼成は良好。一部に自然釉がかかる。胎土は緻密で、灰白色を呈し、播磨産か。

b）井戸埋土出土土器（94～111・210～220・393～395）　土師器杯Ａ４点、皿Ａ６点、甕４点、鍔釜５点、須恵器高杯、壺M、大鉢各１点、黒色土器A類椀11点、B類椀２点と圏足円面硯（PL. 53-609）が出土した。

土師器　椀A（94）c_1手法で調整する。奈良時代末のものである。

杯A（99～102）　口径16cm前後の杯ＡⅠ（102）と12cm前後の杯ＡⅡ（99～101）がある。暗灰褐色を呈し、器壁が薄く、口縁端部が巻き込んで上方へ突出する一群（102）と、器壁が厚く、端部内面が凹端面をなす一群（99～101）とがある。体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁端部はよこなでによってやや屈曲するが、皿ほど強い屈曲とはならない。底部内面には粗い刷毛目の残るもの（100）がある。内面は体部中位から上をよこなで、外面は口縁部のみを強くよこなでし、それ以外は不調整となるｅ手法により調整する。

皿A（95～98）　口径の違いで12.5cm前後の皿ＡⅠ（97・98）と11cm前後の皿ＡⅡ（95・96）がある。杯Aと同様、厚手の一群（95・97）と薄手の一群（96・98）がある。いずれもｅ手法により調整するが、口縁部の屈曲が強く、一部では「て」字状を呈するものもある。

甕（103～106）　球形の体部に強く外反する口縁部を持つ。口縁端部は内側に大きく丸く巻き込む。体部外面の一部に粗い刷毛目を残すものがあるが、大部分は粗いなで調整を行なう。内面は当て具によると思われる凹凸が顕著である。胎土は砂粒を多く含む粗いもので、焼成もあまい。

鍔釜（107～111）　甕と比べて器壁が厚く、胴部の最大径が中央やや下よりとなる。口縁端部の巻き込みも大きく、口縁部の外反も著しい。体部外面には、ごく一部に粗い刷毛目を残すものがあるが、多くは粗いなで調整となる。口縁部内面はなで調整とし、体部への屈曲部に、

横方向の刷毛目が入る。体部内面は、甕同様、当て具によると思われる凹凸が顕著である。胎土は砂粒を多く含む。

須恵器　高杯（393）　脚部と杯部の接合部の破片。杯部内面には、同心円の当て具痕を残す。脚部内外面はロクロなでで調整する。高杯としたが脚部が低い高盤の器形かもしれない。

壺M（395）　残存高8.9cmの小型の壺。底部に糸切り痕を残す。

鉢（394）　外面は粗い削り、内面はロクロなでで調整する。高台が付いていた痕跡がある。内外面に釉を薄く刷毛塗りし、渦巻文などを施文する。釉は白色で、十分に釉化してはいない。

黒色土器　椀（210～220）　13点出土した。ほとんどが内面のみを黒化処理するＡ類であるが、内外面全体を黒化処理するＢ類が２点（219・220）のみ出土している。

210～218はＡ類で、口径15cm前後の椀ＡⅠと13cm前後の椀ＡⅡ（214）がある。いずれも体部は内彎し口縁部が厚くなる。口縁端部内面には１条の沈線の入るものが多い。底部は厚く、断面三角形の低い高台が付く。内面は、体部内面を水平、底部をジグザグに比較的丁寧に磨くが、外面の磨きはきわめて雑である。底部外面に墨書のあるものが２点（217・218）あるが、判読できない。内面に別の個体の高台の一部が窯着するもの（215）がある。

219・220はＢ類で、器形や作りがＡ類と異なる。体部は直線的に立ち上がり、「ハ」字形の高くしっかりした高台が付く。磨きは内外面とも非常に丁寧で、高台内面まで磨きを施す。

ＳＥ491から出土した一群の土器は、10世紀後半の年代が与えられ当該期の大和における土器編年の指標となっている薬師寺西僧坊出土土器[(1)]とよく似た様相を示している。それは、杯・皿がそれぞれ法量の大小で２種類に分類され、杯においては西僧坊でみられたａ～ｄの４種のうちａ・ｂの２種が共通する点や、黒色土器ではＡ類がほとんどで、Ｂ類が少量である点などである。ただし、ＳＥ491出土土器では杯の法量が若干小さくなり、高台付の杯・皿が見られないなど、やや新しい要素も指摘でき、薬師寺西僧坊が火災にあった天禄４年（973）より新しい10世紀後葉の年代を与えることができる。この様に、年代的には西僧坊出土土器とほぼ同時期であるが、器種構成は両者に著しい違いがある。ＳＥ491出土土器では、土師器杯・皿と黒色土器椀が同量見られるとともに、土師器甕や鍔釜が多い。ＳＥ491出土土器の様相から見ると、西隆寺の伽藍東北部の一郭は僧坊とは異なった機能を持った施設であると推定される。

Ｅ　施釉陶器・白磁（PL.54・55）

施釉陶器には、二彩・三彩・緑釉・灰釉がある。土壙や井戸・溝・包含層などからの出土があるが、特に伽藍東北部のＳＧ530を埋めた整地土、包含層からは仏具として使われたものが多数出土し（501～509・386）、この一郭が仏堂的な性格を持つことを示しているので、まずそれについて述べ、その後に他の地域から出土したものについて記すこととする。

仏具として使用

緑釉椀（501～505）　501は底部の破片で、淡緑色の釉がかかる硬陶。削り出しによる蛇ノ目高台を持つ。底部に三叉トチンの痕跡がある。502は淡緑色の釉がかかる軟陶で、山城系と思われる。外面は底部も含めて全面ロクロ削りを行ない、底部に三叉トチンの痕跡がある。503は軟陶で、全面に淡緑色の釉がかかるが、釉調は淡褐色に変色している。体部下半と底部をロクロ削りする。504は硬陶で、削り出しの高台も含めて全面に灰緑色の釉を施すが、外面と内

(1)　奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報告』1987

面の一部に無釉部があり、漬けがけであると思われる。505は貼り付け高台を持つ軟陶。内外全面に施釉し、本来は濃緑色の釉調であったと思われるが、灰黒色に変色している。風化が著しく、トチンの痕跡は不明。

須恵器皿（386）　口縁部の破片で、暗赤褐色を呈し、焼成は非常に堅緻である。内面に降灰がみられる。愛知県猿投窯の製品で、9世紀前半、井ケ谷14号窯期のものであろう。504・505の様な小型の椀と組み合わせて托として使用したと考えられるため、この項に含めた。

二彩火舎（506）　口縁部と体部の一部の破片で、透明釉と緑釉を斑点状に施す。

三彩鉢（507）　鉄鉢形の器形で、同一個体の二片から図上復元した。釉の剝落が著しいが、外面は透明釉と緑釉を縞状に施し、内面は透明釉上に緑釉を点状に施す。内面の一部に褐釉がわずかに残る。

灰釉多嘴壺（508）　胴部の破片で、復元高約11cmの小型品。口頸部は肩部のものも含めて残存していない。外面には暗灰緑色の釉が厚くかかり、内面にはロクロ水挽きのしぼり痕がある。肩部の口頸部を付すための穴は2回にわたって穿孔している。

緑釉多嘴壺（509）　軟陶で、外面全面に濃緑色の釉を施す。口頸部は、肩部に1ヶ所のみ残る。風化が著しく、釉はかなり剥落している。現状では緑釉のみが残存しているが、二彩陶器であった可能性もある。

二彩椀（510）　外面と内面上半に緑釉と透明釉を鹿の子状に施し、内面下半は透明釉のみ施す。外面下半と底部はロクロ削りを行なう。興福寺一乗院出土の二彩鉢[1]や正倉院宝物の磁鉢と同一のものである。

二彩陶器（516）　器形は確定できないが、底部の破片がある。大型の皿か鉢になると思われ、緑釉と透明釉を斑点状に施す。外面には焼き台の痕跡があり、円形に釉が剝離している。ＳＥ492出土。

緑釉陶器（511～515・517）　511は椀の破片で、軟陶。体部下半をロクロ削りする。512は硬陶で、削り出しの高台部。椀か皿になると思われる。ＳＤ484出土。513は軟陶で、壺か水注であろう。胴部に二条の浅い沈線を入れる。ＱＴ22区包含層出土。514は軟陶の皿。全面をロクロなでで仕上げる。ＱＧ45区瓦溜出土。515は軟陶の皿または椀の底部。ＳＥ548出土で、9世紀初頭の年代が考えられる。517は椀の底部と思われ、削り出しによる蛇ノ目高台を持つ。胎土は硬質で、焼成も堅緻である。釉は銀化しており、一見すると二彩陶器のような外観を呈する。ＱＱ17区の包含層から出土。

灰釉陶器（518～523）　調査区全域からおよそ10点出土したが、実測できるものは少ない。器形的には、椀（521•522）、皿（518•519）、段皿（520）などがある。518・521～523は底部内面を露胎で残し、523には重ね焼きの痕跡がある。521はＳＥ491の掘形から出土し、底部に刻線がある（PL.56）。内面は硯として使用したために磨滅しており、一部に墨痕が残る。519はＱＨ44区包含層、518・520・522・523はＱＧ46区周辺の瓦溜出土。

白磁椀（524）　胴部下半から底部の破片。高台は削り出しによる。胎土は白色、精良で、内外面ともに白色の釉を施すが、高台の接地面は露胎で残す。高台の作りがやや雑になっており、唐末～五代の年代が考えられる。東面回廊西方の溝ＳＤ416出土。

---

(1)　奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報1964』1964

F　特殊土製品（PL. 53）

圏足円面硯（601～603・605～609）　601は口径約８㎝の小型品。海部はわずかにくぼませて陸部と区別する。脚部にハ字状の線刻がある。ＰＢ41区の包含層出土。602は脚部から陸部にかけての破片。脚部との境には二条の突帯をめぐらし、突帯の上方には沈線を入れる。脚部の透かしは10箇所と思われる。ＱＱ36区の包含層出土。603は陸部、海部の破片。陸部は上方に突出し、海部との境に低い突線をめぐらす。透かしは20箇所に復元できる。胎土には微小な黒色粒子が混入し、北陸地方の製品の可能性がある。ＱＨ38区の包含層出土。606は残存する透かしの形状が一様ではなく、十字形、または花形のものになるかも知れない。608・609は脚部の破片で、線刻がある。608はＱＧ45区の瓦溜、609はＳＥ491出土。

獣形硯（604）　陸部から海部と左前足の一部にかけての破片で、頭部は欠失する。陸部と海部の境には欠損が著しいが波形の突帯を施し、各波の境にはＶ字形のくり込みがわずかに残る。海部は使用により磨滅している。脚は別に成形したものを貼り付けており、削りによって三本指の表現をする。頭部を欠失するのでどの様な獣形になるかは不明であるが、三本指の表現からみて、猫科の動物になる可能性がある。これまで平城京から出土した獣形硯としては、左京四条四坊九坪[1]、右京八条一坊十四坪の羊形硯[2]、平城宮の鳥形硯[3]、亀形硯があるが、三本指の表現を持つものとしては、これが初例である。ＱＩ36区の包含層出土。

三本指の表現

ミニチュア土器（610～612）　610は土師器の竈。胴部の破片で、ひさしを貼り付ける。ＳＫ388出土。612は土師器の甕。610の様な竈と組み合わせて使用したもの。ＱＪ39区の包含層出土。611は須恵器壺の口縁部。外面に自然釉が降着する。北面築地の南雨落溝ＳＤ429出土。

男根状土製品（613）　灰白色を呈する土師質の焼成で、男根を表現する。全面をなで調整で仕上げるが、亀頭部の付け根は削り出しで表出する。先端に深さ２㎝程の刺突がある。基底部には剝離痕があり、本来は塑像などの一部であったものか。

土馬（614・615）　調査区全域から10点あまり出土したが、全形をうかがえるものは少ない。614は粘土板から頸部、四肢、尾部をつまみ出して成形したもので、胴部横断面は腹部面がくぼむ形となる。左前脚と頭部、尾部の一部を欠失する。竹管による刺突で目を表現し、たずなの表現も痕跡的に残るが、口の表現は省略する。全面をなで調整している。奈良時代中頃の時期で、ＳＧ530出土。615は胴部の破片で、左後脚と右前脚の一部が残存する。全体に小型化し、調整も雑になる。平安時代初頭の時期で、ＰＤ41区の包含層から出土。

土製円板（616）　土師器壺Ａと思われる破片を利用したもので、外面に磨きがある。周縁を擦って円形に整形している。ＳＤ417出土。

土錘（617）　円筒状の器形で、土師質。心棒に粘土板を巻き付けて成形したものと思われ、内面にしぼり痕がある。風化が著しい。ＱＥ46区の包含層出土。

紡錘車（618）　土器片を利用したのではなく、当初から紡錘車として製作したもの。一面は凸面を呈し、他面は平坦である。ＳＫ361出土。

---

(1)　奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983
(2)　奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989
(3)　奈良国立文化財研究所『平城京展』1989

須恵器特殊皿（619）　小破片のために全形は不明であるが、径約35㎝の大型の皿の縁部に復元径11㎝ほどの小型の皿を付したもの。小型の皿は１箇所のみ残存するが、本来は大型の皿の口縁部をめぐって多数付いていたものと思われる。小皿の中心部と、大皿の外面から小皿に向けての２箇所に刺突がある。あるいは、仏具として使用したものかと思われるが、詳細は不明。東面築地ＳＡ420すぐ東方の、ＲＬ14区暗灰粘土出土。

Ｇ　墨書土器・線刻土器（PL. 56）

調査区内の溝、包含層などから、およそ30点の墨書・線刻土器が出土した。ほとんどが須恵器で、灰釉陶器・黒色土器が少量あり、土師器に記したものは僅少である。総じて文字が不明瞭で、判読できるものは少なく、記載内容もまとまったものではない。主なものの釈文をTab. ３に示すが、代表的なものについて説明しておく。

397は須恵器杯Ｂ蓋。つまみ部に「廾」の墨書がある。平城宮土器Ⅲか。

398は須恵器杯Ｂ。底部外面に「㐅」の墨書がある。

399は須恵器杯Ｂ。底部外面に「九」を線刻する。内面には漆が付着している。

400は須恵器杯Ｂ蓋。墨痕が薄く、判読が困難であるが、外面に「大」、内面に「連」や記号などを習書する。

401は須恵器杯Ｂ蓋。頂部外面に「天」の墨書がある。内面を硯として使用している。

Tab. 3　墨書土器一覧表

番号	内容	器種	部位	出土地区・遺構	番号	内容	器種	部位	出土地区・遺構
22	×	土師器　杯Ａ	底部外面	ＳＫ361	401	天	須恵器　蓋	頂部外面	ＱＩ39
62	廾	土師器　椀Ａ	底部外面	ＳＧ530	402	□	須恵器　杯Ｂ	底部外面	ＱＪ40
217	□	黒色土器　椀	底部外面	ＳＥ491	403	卅ヵ	須恵器　杯Ａ	底部外面	ＱＪ39
218	□	黒色土器　椀	底部外面	ＳＥ491	404	火	須恵器　蓋	頂部外面	ＱＪ38
391	□	須恵器　杯Ｂ	頂部外面	ＳＥ491	405		須恵器　蓋	頂部外面	ＱＪ38
397	廾	須恵器　蓋	つまみ	ＱＪ39	406	之	須恵器　壺	底部外面	ＱＪ38
398	㐅	須恵器　杯Ｂ	底部外面	ＱＭ37	407	×	須恵器　壺	底部外面	ＰＡ52
399	九	須恵器　杯Ｂ	底部外面	ＱＩ38	408	×	須恵器　蓋	つまみ	ＯＰ44
400	大 連□□	須恵器　蓋	内外面	ＰＣ41	521	□	灰釉陶器　椀	底部外面	ＳＥ491

Ｈ　平城京造営以前の土器（PL. 57）

1）縄文時代の土器（221）

縄文晩期末葉の土器

東面回廊東方の溝ＳＤ440から、突帯文土器の深鉢１個体が出土した。口縁部から胴部にかけての破片で、全周の約1/4ほどが残る。口縁端部からやや下がった位置に１条、胴部に１条の計２条の突帯を施し、突帯上に箆状工具でＤ字形の刻み目を入れる。口唇部に刻み目は入れない。外面は、２条の突帯間は、巻貝条痕を行なった上になでによる調整、胴部の突帯以下は不調整で、粘土紐の継目が残る。内面は巻貝条痕で調整。色調は暗褐色で、胎土に角閃石は含まない。晩期末葉の船橋式土器で、この時期の土器としては、大和盆地北部では初めての出土である。なお、ＳＤ440は断面形がＶ字形をした人為的に掘った水路で、京都大学構内遺跡[1]な

(1)　京都大学埋蔵文化財調査研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』1984

どにも類例がみられ、稲作農耕の開始を考える上で、極めて重要な遺構である。

2）古墳時代の土器（112～128・414～426）

a）ＳＤ529出土土器　ＳＧ530の下層には前身の古墳時代の溝ＳＤ529があり、その埋土から大量の古墳時代の土器が出土した。土師器、須恵器があり、年代的には５世紀末から７世紀初頭にわたる。これらの土器は層位的に出土したものではないために、器種ごとに説明を行なうが、必要なものについては年代も合わせて記すこととする。

土師器　杯（112）　小さな平底で、口縁部が内彎しながら開く器形。底部は削りで調整し、体部外面に細かい刷毛目が一部残る。外面の底部付近に黒斑がある。胎土に雲母を多量に含む。

椀（113・114）　丸底の偏平な体部に、外反する短い口縁部を付す器形。113は口径12.2㎝、内外面をよこなでで調整する。114は口径14.5㎝、底部外面を削りで調整し、黒斑がある。焼成は良好で、胎土に多量の雲母を含む。

高杯（115～118）　115は杯部の破片で、段を持ち、口縁部は直線的に外反する。段上には放射状の線刻がある。116は内彎しながら開く杯部で、内外面をよこなでし、脚部との接合部付近には指押さえがある。117は段を持って外反する杯部と脚部の破片。杯部外面上半はよこなで、下半は不調整で、内面には細かい磨きがある。118は脚部の破片。粘土板をしぼって成形した痕跡が明瞭で、外面にねじり痕、内面にはしぼり痕がある。

小型丸底壺（119）　やや偏平な球形の体部に直線的に外反する口縁部を付す器形。底部を欠失する。外面の調整は、口縁部は縦方向、体部は斜め方向の刷毛目を施した上に横方向の磨きを行ない、口縁端部はよこなでする。内面は、口縁部は斜め方向の刷毛目、胴部上半は不調整、口縁部と体部の接合部と胴部下半は削りを行なう。

甕（120・121）　120は小型の甕。球形の体部で、内外面に細かい刷毛目を施し、外面に黒斑がある。121は卵形の体部を持つ長胴の甕。口縁部には、外面が縦方向、内面は横方向の刷毛目がある。胴部は、外面は縦方向の刷毛目、内面は縦方向のなでで、底部外面はなで、内面は削りで調整する。外面には黒斑があり、煤が付着する。

須恵器　杯身（409～411）　蓋と身が組み合う杯で、図示したものは全て身。蓋は小破片のものが出土しているだけである。409は口縁部の立ち上がりが高く、端部は内傾する面を持つ。底部外面をロクロ削りし、ロクロは反時計回り。６世紀中葉のものであろう。410・411は口縁部の立ち上がりが低く、内傾して端部は丸くおさめる。底部外面をロクロ削りし、中央部が尖る形態となる。ロクロの回転は410が反時計回りで、411が時計回り。７世紀初頭に位置づけられる。

把手付椀（412）　底部から胴部下半の破片で、把手は欠失するが、接合痕が残る。底部外面は不調整、胴部下端は手持ち削りで調整し、胴部上半と内面はロクロなでで調整する。

瓶（413～416）　球形の体部で外反する二重口縁を持ち、胴部に１箇所穿孔がある。413は胴部下半をロクロ削りし、ロクロは時計回り。胴部に櫛描列点文がある。414はやや大型のもので、胴部外面下半はロクロ削りを行ない、内面には叩きの当て具痕がある。ロクロは時計回り。口縁部と胴部に櫛状工具による波状文がある。また、穿孔の下には３条の焼成前の線刻がある。415は口縁端部と底部を欠失する。口縁部には櫛描波状文、胴部には２条の凹線を入れ、

その間に櫛描列点文を施す。いずれも6世紀前半のものであろう。416は小さな平底となり、口頸部もやや長い。胴部下半と底部はロクロ削りし、ロクロは時計回り。口頸部に2箇所、浅い凹線がある。413～415よりやや新しく、6世紀末から7世紀初頭の年代が考えられる。

b）その他の遺構・包含層出土土器

122・127はO地区の斜行溝ＳＤ370出土。122は土師器鉢。丸底で、口縁部は2段に外反する。風化が著しいが、胴部外面に横方向の磨き、内面に放射状の暗文が残る。222は朝顔形埴輪の口縁部。風化が著しく、調整は不明。

123はＳＢ521の礎石据付け穴出土の土師器高杯。裾部を欠失する。杯部と脚部の接合部には、外側に厚く粘土を貼り付けて補強する。風化が著しく、細部の調整は不明であるが、杯部内外面に刷毛目が残る。

417・418は、後述するＳＤ524を切る土壙ＳＫ526出土の杯身で、2個体が近接して出土した。底部外面をロクロ削りし、ロクロは時計回り。器形、法量ともにＳＧ530出土の410に似る。

419はＳＧ530東岸にあり、北流して西折し、ＳＤ523となってＳＧ530に注ぐ蛇行溝ＳＤ524出土の須恵器杯蓋。口径12.6㎝、高さ4.9㎝。天井部と口縁部の境の稜は短く、鋭さに欠ける。口縁端部は内傾する凹面を持つ。天井部は丸みを帯び、全面を入念にロクロ削りする。ロクロは時計回り。5世紀末から6世紀初頭のものである。

124～126はＳＫ497出土。124は土師器高杯の脚部で、外面に縦方向の磨きがある。内面にはしぼり痕があり、裾部内面には刷毛目を施す。125は土師器小型丸底壺。口頸部が長く、器高全体の約半分を占める。口頸部は内外面ともによこなで、胴部外面下半を削りで調整し、胴部上半には磨きを施す。胴部内面に刷毛目が残る。126は土師器甕。風化が著しく調整は不明。

127はＱ地区の斜行溝ＳＤ493出土の土師器甕。口縁部は二重口縁となり、胴部内面は削りで調整する。外面の調整は、風化のために不明。

420はＳＫ527出土の須恵器瑤。口頸部を欠失する。体部外面下半に平行叩き目、内面に当て具痕が残る。胴部中位には沈線を1条入れ、その上に櫛描列点文、下に櫛描波状文を施す。底部外面にヘラ記号があり、肩部には自然釉が降着する。

421はＱＴ22区包含層出土の須恵器高杯。口径19.0㎝、高さ13.7㎝、脚部高6.2㎝。杯部は半球形でやや浅い。杯部の中央やや上に2条の突帯を付し、突帯の上下には凹線を入れる。突帯下には櫛描波状文を施す。脚部には、長方形の一段の透かしを4箇所に入れ、端部は段をなさず、丸みを帯びる。杯部の底面付近をロクロ削り、他をロクロなでで調整する。ロクロは時計回り。5世紀末から6世紀初頭の年代が考えられる。

3　木　製　品

今回報告する木製品は219次調査で検出した井戸ＳＥ491と223-21次 調査および228次調査で検出したＳＤ529・ＳＧ530からの出土品である。板状品・棒状品などを含め60点余りが出土したが、その多くは腐朽・破損が著しく、ここでは図化に堪えられるもの23点のみを報告する。

Ａ　ＳＤ529・ＳＧ530 出土木製品（PL.58, PL.59）

古墳時代の槽

槽（PL.58-1）　ＳＤ529から杉の板材10枚ほどとともに出土した。出土層位から古墳時代後期の遺物と思われる。長軸方向に折損し、ほぼ一半のみが残る。平面は楕円形に復元しうる。比較的平坦な底部から緩やかに傾斜しつつ口縁部が立ち上がる。木口面の口縁が肥厚する。内外面ともに腐食が進行し、加工痕等は不明瞭である。現長91.2cm、復元幅39.2cm、復元高10.4cm。ヒノキ材を横木取りで製作する。

部材（PL.58-2）　ツガ属心持材の表面を丸く仕上げ、２カ所に仕口を入れる。背面は折損し原形は不明であるが、平面に仕上げられていたようである。２カ所の仕口は梯子の足掛け状を呈するが、身に対して垂直となる面が対向しており、梯子にはなりえない。建築部材であるとすれば、垂木の反りを部分的に補正する‘枕’である可能性がある。長さ70.4cm。ＳＤ529出土。

支柱（PL.58-3・4）　３はヒノキの心持丸太から作る。一木梯子の足掛け状の段を削り出す。段の上面は身に対して垂直面をなす半円形を呈する。その段は幅6.8cm、奥行き2.0cmと小さく、実際に足掛かりとすることは不可能であることから、横木を受ける段と考えられる。上端木口は斧で切断されているが、本来はさらに上方へ伸び、そこにも段が削り出されていたものとすれば、２本の支柱に横木をわたす組梯子の支柱となる可能性がある。下部は腐食が進行し、原形は不明。現長92.0cm。４は二葉松類幼木の股部を利用した一種の支柱の上端破片。一枝を角状に残し、その枝に対向する幹に足掛け状の段を削り出す。この股と段とを利用して横木をわたしたものであろう。背負梯子の上端破片である可能性もある。下端は折損し全長は不明。現長21.2cm。３・４ともＳＤ529出土。

杭（PL.58-5•6•7）　５は完形品。カヤ柾目材の一端を両面からはつり落とす。長軸方向のほぼ中央に奥行き1.7cmほどの段を残し、上部ははつり落とし、下部は斜めに削り込む。全長19.2cmと小型であることから支柱などの用途は想定しがたく、杭の一種と考えておく。６はＳＧ530の埋土内に打ち込まれた状態で検出された。奈良時代後半の橋脚に用いられた杭列ＳＸ531の一本である。丸棒の先端を削り落とし、尖頭状に仕上げる。アカガシ亜属の心持材。現長16.4cm。７は奈良時代後半の木製暗渠ＳＸ533を固定する杭として用いられていたものである。二葉松類の心持材の一端を削り落とし尖らせる。尖端部をのぞき腐朽が著しく、表層部分は剝落する。現長37.6cm。

大足枠木（PL.58-8）　断面長方形のスギ角材に長方形の孔を穿ったもの。上下両端が折損する。足板を取り付ける枠の縦木にあたる。横木をはめ込むほぞ穴が７つ以上穿たれる。ただし、これと組み合うべき他の部材は発見されておらず、用途は確定的ではない。現長45.0cm、幅5.6cm、厚さ3.0cm。ＳＤ529出土。

曲物底板（PL.58-9）　ヒノキの板目材製の曲物底板が１点出土している。腐食が著しく、加工痕は不明瞭で、側板との結合方法も判然としない。復元径36.4㎝、厚さ0.9㎝。ＳＤ529出土。

杓子（PL.59-11）　奈良国立文化財研究所編『木器集成図録　近畿古代編』でＢ型式と分類される杓子形木器の先端部破片である。ヒノキ板目板を薄く削り、先端を半円形に作る。かなり腐食が進む。現長17.2㎝。ＳＤ529出土。

加工板（PL.58-10，PL.59-12）　10はクリの板目材を包丁形に仕上げたもの。完形品。腐食が著しく、加工痕・使用痕ともに不明瞭で、用途は特定できない。12はヒノキの割板を不等脚台形に仕上げ、一側縁の下端を湾曲気味に削り落とす。上部は折損するが、一側縁に半円形の削り込みがある。円形の枘穴となるか、さらに細長く続くものかは不明。支脚のような用途が想定できる。現長28.0㎝、厚さ1.1㎝、最大幅8.4㎝。ＳＤ529出土。

Ｂ　井戸ＳＥ491 出土木製品（PL.59）

匙（PL.59-13）　ヒノキの細板を薄く削って作る匙形木器の完形品。先縁を半円形にするもので、『木器集成図録』にB型式と分類されるものである。明確な使用痕は認められない。長さ11.6㎝。

尖端棒（PL.59-14）　ヒノキの薄板から割りとった角棒。一端は折損するが、他の一端を尖らす。現長18.3㎝。

箸（PL.59-15）　ヒノキの木片を小割にした後、棒状に整形したもの。完形品。断面は六角形を呈する。上下両端がやや細くなる。長さ15.9㎝。

加工棒（PL.59-16）　ヒノキの割材を隅丸長方形の細棒に加工したもの。一端を折損する。残りの一端は斜めに削り落とす。用途不明。現長26.7㎝。

柄杓柄（PL.59-17）　ヒノキの割材を断面方形の細棒に加工したもの。一端を折損する。先端は断面円形に細く尖らせる。この井戸からは曲物側板の小破片数点も同時に出土しているが、この柄と組む柄杓の身の部分の残片であろう。現長29.6㎝。

斎串（PL.59-18）　祭祀具としては斎串１点が出土している。ヒノキの柾目薄板を上端を圭頭状、下端を剣先状に作ったもので、両側面の５カ所に三角形の切り欠きを施す。『木器集成図録』でＣⅥ型式と分類されるもの。現長44.0㎝。

Ｃ　ＳＥ491井戸枠転用の扉板と中方立（PL.60～62）

井戸ＳＥ491の井戸枠にはヒノキの扉板が転用されていた。材の上半は腐朽していたが、下半ではいずれも当初の幅を完存していた。幅の寸法からＡ～Ｃ材とＤ材の２種に分類できる。Ｄ材のみは他と細部手法も異なり、別の建物か違う部位に用いていたものと推定される。以下、各材の所見を述べる。

Ａ材（PL.60-20）は井戸枠の北側板として用いられていたものである。幅約90㎝の一枚板に幅9.5㎝の角材を本実矧ぎで継ぎ足して一枚の扉板とする。下端から約37㎝の位置に枘穴状のくり込みをいれ、釘で打ちとめ、その釘頭を埋め木で隠す。また、下端から118㎝の位置には枘穴が切られており、太枘をはめ込んでいたようである。下端木口には端喰を埋め込み補強する。端喰を固定した鉄釘の脚部の破片１点が打ち込まれたままの状態で残っていた。軸部分は

破損したものとみえ、その部分を切り取って後補している。ここでも釘頭を埋め木で隠す。現長177.8cm、幅98.4cm、厚さ6.5cm である。

B材（PL.60-19）は井戸枠の東側板として用いられていたもので、一枚板からなる。A材とほぼ同じ規格で、幅99.6cmを測る。厚さはA材よりも若干厚く7.2cmある。下端木口に埋め込みの端喰をもつ。それを固定する釘穴が3カ所残るが、釘そのものは失われている。また、下端には直径6.8cmの軸が造り出されている。軸を含む現長は165.6cm。

C材（PL.61-21）は井戸枠の南側板として用いられていたもので、ほぼ同一寸法の4枚の板を本実矧ぎで接合し、一枚の扉板に仕立てている。下端から60cmほどの位置で突出する側が入れ違いになっている。また、下端から約38cmの位置には枘穴を切り、太枘をはめ込む。2枚目と3枚目との間にはその太枘の破片が残る。下端木口には端喰が埋め込まれ、釘で固定される。A材と同様、軸部を後補しているが、本材では埋め木によって釘頭を隠すことはしていない。軸を右に見る面の下端から5.0cmの位置に水平方向に風蝕差の境界線がはしっている。蹴放ち（上端であれば楣）のあたりを示すものである。現長149.6cm、幅96.4cm、厚さ6.1cm。

D材（PL.62-22）は井戸枠の西側板として用いられていたもので、2枚の板を本実矧ぎで接合する。下端から24.4cmの位置には枘穴を穿ち、太枘をはめ込む。2枚の板の幅は29.2cmと59.6cmで、それぞれほぼ1尺と2尺に復元できる。B材と同じく作り出しの軸が残る。その直径は7.2cmである。他の材と異なり端喰はない。本材の最大の特色は、横桟と八双金物の釘痕を残す点である。まず、軸を右に見る面（この面を仮りに表面とする）では、横桟は下端から33.6cm、92.4cmをそれぞれ中心線とする位置に、その上下両端を釘でとめる手法で装着される。裏面では下端から40.0cm、94.0cmの位置に横一列に釘止めされる。一方、八双金物は、釘痕だけではなく、部分的に残るあたりの線から、その大体の形状をも知りうる。すなわち、先端が突出するいわゆる出八双である。下端から27.2cmを中心線とする位置に、表裏いずれも11本の釘を用いて装着されるが、裏面では先端がやや右上がりに取り付けられている。ところで、表面で見るかぎり、下段の横桟を留める釘の下列と八双金物を留める釘の上列が同じ水平位置にあり、両者が同時に装着されていたとは考え難い。その先後関係は判断しかねるが、一方から他方へ付け代えられたことが判る。なお、裏面の下端右寄りには焦げ痕がみとめられる。ただし、扉として使用されていた時点で火熱を受けたものであるかどうかは不明である。

中方立　扉板に関連する遺物として、扉の中方立とも呼ぶべき遺物が出土している（PL.62-23)。井戸枠を固定する支柱として利用されていたもので、幅12cm、厚さ6cmほどのヒノキ角材を、一面を「凸」字形に仕上げ、もう一面の両角を面取りする。一端は完存するが、一側縁を斜めにはつり落としている。中方立としての使用を終えた後の加工であろう。もう一端は腐朽・欠損する。現長124.8cm。

4　金属製品・石製品

A　金属製品（PL.63）

鉄釘（PL.63-1～10）　鉄釘は計10点出土している。銹化の進むものが多い。1～6は折頭釘である。上端を叩きのばし、ほぼ直角に曲げて釘頭としたものである。2・3・6の3点がほぼ完形、残りの3点は下端を折損する。銹化のあまり進んでいないものについては表面観察によって、また銹化の進んだものについては折断面の観察から脚の断面形が判るものではいずれもほぼ正方形を呈する。大きさには大・中・小の別がある。出土地点は1がＱＨ44区暗灰砂層、2と6は井戸ＳＥ419掘形埋土、3はＱＲ21区橙灰砂層、4と5はＱＨ46区瓦溜である。方頭釘としては、7と10の2点がある。7は銹化が著しい。脚が頭部の一方に偏在する。ＱＥ47区東西溝1から出土。現長9.3cm。10は井戸ＳＥ491の井戸枠として転用されていた扉板に打ち込まれていたもの。下部の大半を折損する。円頭釘に分類できるのが8と9の2点である。8は井戸ＳＥ491掘形内より出土。現長7.7cm。9は東西溝ＳＤ429上層から出土。現長8.0cmである。

不明鉄製品（PL.63-11～14）　11はやや湾曲する小型の棒状品の一端近くに瘤状の突起のあるもの。長さ5.4cm。ＱＮ22区灰白砂層出土。12は東西溝ＳＤ429下層から出土した小型の棒状品。表面に繊維状のものが巻かれてあったような痕跡が残る。長さ4.7cm。13は断面がほぼ三角形を呈する小型の棒状品。一端で折損する。何らかの工具破片であろう。ＰＣ51区暗褐砂質土層出土。14は厚さ約3mmの鉄片。刃部を研ぎ出してはおらず、利器の破片ではない。ＱＮ26区橙灰砂層から出土。

銭貨（PL.63-15～18，PL.63-20）　井戸ＳＥ448の井戸枠外から2点の和同開珎が出土した（15・16）。ともに鋳上がりはよい。いずれも「開」の字の門構えを「門」につくる「隷開和同」である。17・18の2点の延喜通寶は改修後の井戸ＳＥ491埋土からの出土品である。いずれも鋳上がりが悪く、銭文も不鮮明である。延喜通寶は皇朝銭のうち11番目に発行されたもので、その始鋳は延喜7（907）年。その後、約半世紀の長期にわたり鋳造が行われた。この銭貨の出土によりＳＥ491のおおよその年代が与えられる。PL.63-20に載せる5点の銭貨は土器埋納遺構ＳＫ449内に置かれた土師器甕の内部に納入されていたものである。5点のうち1点は離れているが、他の4点は互いに固着しており、破損の危険があるため分離することが不可能であった。分離している1点は神功開寶である。功の傍を「刀」につくりその第2画を長くのばす「長刀」で、開の門構えは「門」につくる。他の4点のうち2点は表面観察およびＸ線透視により、和同開珎および萬年通寶であることが判る。和同開珎は「隷開和同」、一方の萬年通寶は銭文が不鮮明で種類は特定できない。残る2点は銭文不明である。

仏教関係の飾り金具

青銅飾り金具（PL.63-19）　厚さ約2mmの青銅薄板の表面に文様を鋳出したもの。ほぼ完形で、現長2.1cm、幅2.2cm。三葉状の小花文を中心に配し、その両側を唐草文がとり囲む文様構成をとる。三葉文の上部には透かし孔を穿つ。その用途を特定することは難しいが、仏像光背あるいは厨子など仏教関係の器物にとり付けられる飾り金具である可能性が高い。ＱＮ35区茶褐土層出土。

B　石製品（PL.64）

敲石（PL.64-1.2）　鉱物や混和剤などを敲きつぶしたとみられる敲石が２点出土。１は石英斑岩の河原石を利用したもので、おそらく使用の結果、ほぼ半分に割れている。現長8.8㎝、幅6.2㎝、厚さ6.1㎝で、比較的平坦な両面に深さ１～２㎜の敲打によるくぼみが残る。ＱＲ32区灰褐土出土。２は溶結凝灰岩の自然礫を緩やかな稜を持つ扁球形に整えたもので、比較的平坦な２面に６㎜、３㎜ほどの敲打によるくぼみが残るほか、その２面に直行する他の１面にも稜線沿いに敲打の痕跡が残る。長径6.0㎝、短径5.9㎝、厚さ4.4㎝。ＱＲ32区灰褐土出土。

古墳時代の勾玉

勾玉（PL.64-3）　装身具としては、勾玉１点が出土。瑙瑪製でやや白濁するが、ほぼ透明である。長さ2.2㎝、幅1.2㎝。胴中部での長径6.5㎜、短径5.0㎜である。片面から穿孔している。池状遺構ＳＧ530から出土。平面形は「コ」の字形に近く、古墳時代後期の遺物と考えられる。

紡輪（PL.64-4•5）　紡織具としては石製紡輪２点が出土した。いずれもＳＧ530からの出土である。４は緑色片岩ないしは緑色溶結凝灰岩製でほぼ完形品。直径4.3㎝、厚さ1.1㎝の截頭円錐台形を呈する。重さ26g。斜面はやや内凹する。穿孔は両面から行われており、孔の直径は上・下面とも5.8㎜である。上面の孔周囲に刺突により直径1～1.5㎜、深さ0.5㎜ほどの窪みを穿つ。下面には孔をとり囲むように不整円形が、さらにその外側に放射状の弧線文様が線刻される。５は緑色片岩製で、上・下面ともほぼ半ばが剥落している。直径4.8㎝、厚さ0.8㎝、重さ28gで、やはり両面から穿孔されており、孔径は8.0㎜である。上面には交差二重線が放射状に並ぶ線刻が、下面には４と同じく孔を中心とする放射弧線の線刻が施される。

砥石（PL.64-6～12）　砥石は計７点が出土している。6・7の２点は比較的大形の柱状品である。６はほぼ方柱状を呈するが、一面の半ば以上が欠損。現長14.7㎝、幅・厚さとも3.2㎝である。方柱の対向する二面の全面が使用により摩耗しているほか、他の一面の下半部にも研ぎ減りが認められる。採石時ないしは整形時のものと思われる削り痕が残り、一面には若干の付着物がある。砂岩製で、いわゆる荒砥にあたろう。ＱＰ20区橙灰砂層出土。７は現長15.0㎝、幅2.6㎝、厚さ3.6㎝で、砂岩製である。対向する二面と上端面が平滑であるが、他の面は折損。平滑面には若干の研ぎ傷が認められるほか、一面の上端近くは敲打のためか表面がつぶれる。８は断面長方形の定型的な砥石で、石材も一般的に見られる流紋岩製である。いわゆる中砥にあたろう。長軸方向の四面いずれも平滑な使用面となる。上下両端面には凹凸があり、研磨には使用されていない。現長8.6㎝、幅4.5㎝、厚さ3.7㎝である。ＱＥ46区暗灰砂層から出土。９と10はいずれも石英斑岩ないしは花崗斑岩製で、やや多孔質な点に特徴がある。ともに断面長方形で、長軸方向の四面を使用する。９は現長5.3㎝、幅5.0㎝、厚さ3.3㎝で、上下両面は湾曲気味に研ぎ減る。かなり使い込まれており、折損部での厚さは0.5㎝しかない。ＯＰ47区茶灰土層からの出土。10は上下両端を欠損。現長は5.0㎝、幅4.9㎝、厚さ1.8㎝を測る。長軸方向の4面を使用する。特に一側面は研ぎ減りで若干内凹する。ＰＫ48区の整地土層からの出土。11はアプライト製の長条形砥石である。断面は正方形に近い。上端は折損しているが、孔が穿たれており、紐などを通して吊り下げたものであろう。長軸方向の四面を使用する。ＰＫ49区整地土から出土。12は流紋岩（？）製の小型の砥石である。長軸方向の四面および下端面を使用する。上下両面は非対称に研ぎ減る。折損部での厚さは0.5㎝。ＰＧ51区暗灰褐土から出土。

5　土器埋納遺構出土遺物

回廊ＳＣ330東北隅中央の鬼門の位置にあたる礎石据付掘形の底から、土師器甕Ａが正立した状態で出土した（Fig42）。内部には土が充満していたが、慎重に土を取り除いたところ、甕の底部で銅銭５枚と織物の断片・土師器皿Ｃ１点・土師器甕胴部破片３点を検出した（Fig. 43）。銅銭は和同開珎・萬年通宝・神功開宝各１枚、銭文不明銭２枚である。

埋納当時の状態を復原すると、まず甕の底部に布に包んだ銅銭をおき、上に土師器皿Ｃをかぶせ、甕胴部破片で蓋をしたと推定される。銅銭は重なって検出されており、紐で連ねられていたようだ。出土状態からみて回廊建立時に礎石据付掘形底部に置いたもので、この上に根石が置かれ礎石が据え付けられたと推定できる。

埋納時期は銭貨から神功開宝の初鋳年である天平神護元年（765）を遡らない。今回出土した土師器甕Ａは、外面が縦方向のハケメ調整、内面が一部にハケメを残すものの大部分がナデ調整となる。また口縁部から胴部へのくびれ部に強いヨコなで調整がはいるといった特徴をもつ。これまでの平城宮出土の土器の編年研究によって、土師器甕Ａについてもほぼその変遷が明かとなってきている。口縁部の外反度、口縁端部の肥厚度、胴部最大径がやや下寄りとなる点などから、平城宮土器編年第Ⅳ～Ⅴ期に位置づけられ、天平宝字末年から宝亀年間を中心とする年代観が推定され、銭貨の結果と矛盾しない。礎石据え付けの直前という、遺構の上からの年代とも矛盾しない。

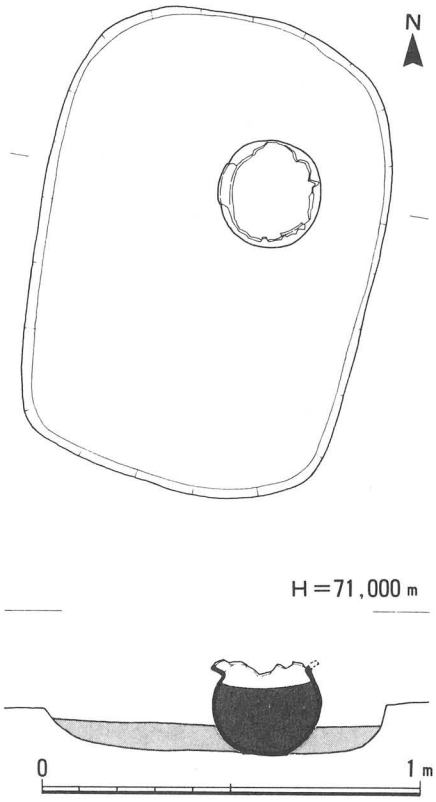

Fig. 42　土器埋納遺構実測図

土器の年代は平城宮土器編年第Ⅳ～Ⅴ期

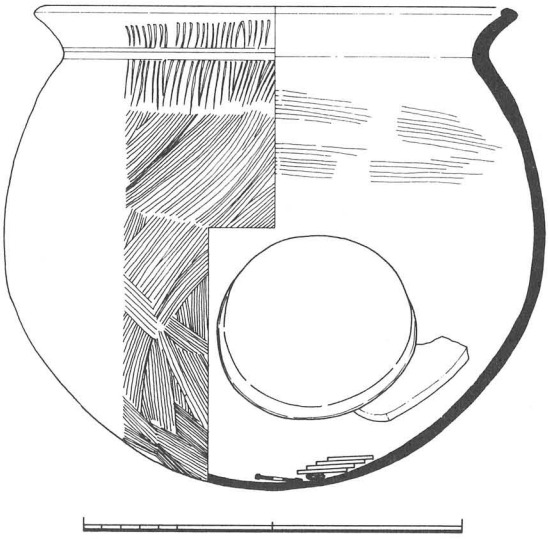

Fig. 43　土器・銭貨の出土状況